

# まちでつながる 2011→2012 ちょっと、生きやすくなるろう。

かまがさきの街で  
体を動かしたり、詩をつくったり、  
暮らしや気持ちを大切に。  
ちょっと不安な体調や歯のこと  
気になっていること  
みんなで、おしゃべりしたりします。

NPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)





## はじめに

まちのなかで、縁側みたいに腰かけていろんな話ができるような機会があったらいいと思ってはじめました、たとえば、ああそうなのね、と思われることだろう。ところが、この事業はそれほどすんなりしたものではない。もっとざらざらした現場の問題がある。ぎこちない感情—暴力や問題の抱え込み、依存や負目などといった、そこにいることが大事でありながらそこにいることも辛くなるような事態に日々直面してしまう。これを我慢せずに捉えたいが、どう捉えたらいいのだろう。誰かに聴きたい話し合いたい、という切実な理由によって企画されたものである。

この背景のひとつには、地域の歴史—暴動が起って来た日雇い労働者のまち、寄せ場という独特のあり方に由来するだろう。またわたしたち自身、何の専門性も持たない素人がまちのまんなかに誰でも来てほしい(表現の)場をつくってしまった経緯もある。丸腰で釜ヶ崎という現場に入ったようなものだ。日々悩み迷い、何かに直面する。だから誰かとともに、日々のなかに、学びの場、日々のこころを落ち着ける場をつくりたかった。

講師や相談員としてお招きしたのは、それぞれが現場で格闘してきた方々で、ここにいる人たちの存在、悩むわたしたちをそのまま受けとめてくれた。おしゃべり会やワークショップの参加者も自ら語る。そのことばにハッと、肩にそっと手をあててもらったような気がする。「悩んでいいんだな」と、ここから思う。

こうして、2010年にはじまった「えんがわ」事業は一年間つづき、すこし間をあけて再び、今度はまちのなかのいくつかの場で、おしゃべり／健康／表現という3つのプログラムをもって再開した。

本書は2011年～2012年にかけてのえんがわ事業の取り組みを報告し、これからの活動のヒントを見だし、手に取ってくれたみなさんとも共有したいと願っている。

## 01 えんがわおしゃべり相談会

02 さざ波のような、えんがわ  
西川 勝

03 とらわれず、新たな問いが問われること  
倉田めば

05 回復しながら生きる — 回復と表現、子どもの頃のこと  
坂上 香

06 一歩はみだして生きる — シングルのまち釜ヶ崎まちあるき  
原口 剛

07 一歩はみだして生きる — シングルのまち釜ヶ崎まちあるき  
イダヒロユキ

08 しんどいと共に生きる — しんどい状況にある人と一緒にいる時どうする?  
アサダワタル

09 空を見上げて生きる — 宇宙とケア!  
尾久土正己 レポート: 上田假奈代

10 関わりあいながら生きる — 聞くことと話すこと、その練習  
宮地尚子

11 誰かと一緒に生きる — 仕事のこと、介護のこと  
横 邦彦

12 迷い考え選びながら生きる — 人生の岐路に立った時に  
浅野卓夫

13 依存と共に生きる  
椎名保友

14 問いながら生きる — 境界線／エイズのこと、ジェンダーのこと  
樋口貞幸

15 問いながら生きる — 境界線／エイズのこと、ジェンダーのこと  
山田創平

16 参加者と講師のおしゃべり記録より

## 19 けんこう相談会 レポート 実施データ記録より

## 22 表現のワークショップ

24 体を動かす  
佐久間 新

26 出会いを楽しむ  
岩橋由莉

28 ことばを楽しむ  
上田假奈代

30 にお話詩 / 思い出の場所詩 / 身体詩

## 32 まちでつながる まとめ

# えんがわおしゃべり相談会

## 場をつくる、ささやかな自治のための練習

### みんなが素直にいたい場

2010年度のえんがわおしゃべり相談会のなかでふりかえりをしたときに、講師の方から講師ひとりではなく分野ちがいのふたりで場をつくってみてはどうか、とアイデアがあがった。そこで今回は講師ふたり体制にした。9回の開催のなか、薬物依存の当事者であり大阪ダルクの施設長である倉田めばさんと看護師の西川勝さんには各4回ずつの講師をお願いした。音楽ならば即興セッションというのだろう。めばさん西川さんは迎えるもうひとりの講師と初対面であっても、この場をいつも風通しよく、みんなが素直にしゃべりたくなる場をつくってくれた。

おしゃべり相談会は、いわゆる勉強会でも個別相談会でもない。けて広くない会場で、講師の方が最初に10～15分ほど話をする。なぜここに居るのか、ということ話してくれる。飾り気のない率直なことばは、会場の温度をあげる。参加者たちも順々に自分の関心や悩みを話しはじめる。みんなが真剣に聴く。

### ささやかな場、ささやかな自治

企画を担当したスタッフ植田裕子は次のように語る。「この企画やってて迷うことがいろいろあって。相談会って人数がたくさんいるとやりにくいじゃないですか。私的なことが語れなくなっていく」確かに参加人数が増えると、数字でみる費用対効果があがるわけだが、参加者が話したいことが話せるかというと、そうでもない。むしろ十数人くらいのほうが落ち着いて深く話しあい聴きあうことができる。会にたくさんの方が来てほしいが、実際あまり多く来てもらっても困るという矛盾を持つ。各回のタイトルは、わりとばくとした大きなテーマであるが、非常に個人的なことを話すという特徴がある。おしゃべり相談会

という枠組みからしてそうなる。だからこそ、マイクなどの拡声装置を使わず、初見であっても、立場が違っても耳を澄ましあえる十数人の話しあう場という尊い経験を持つことに価値があると考えたい。そして、ここでの経験がちいさな熱となって持ち帰られ、それぞれの日常のなかで活かされることを願う。数値になりにくいけど、効果(アウトカム)として考えたい。

### わずかな振動をキャッチしようとしてつとめる場

また各回のテーマを設定した彼女は続ける。「テーマをもっと具体的にすることはできる。でも自分の普段の悩みごとって、漠然としてるなと思って、(だから)どうとでも取れるようなものにした」この発言からもわかるように、わたしたちはこの場所で働くわたしたち自身の気持ちとズレないことを大切にしている。ことばひとつでも繊細に考えるため、わかりやすいことばにならないこともある。口ごもったり、歯切れが悪かったり、よわよわしい声になったり、とんちんかんになるのはそのためだ。そして、感覚的なことばやざらついた質感のことばがテーマに選ばれ、そのなかの語らいのなかでかすかな手ざわりを感じとる。そう、だから、わずかな振動をキャッチしようとしてつとめる場であろうとすることからこそ、素直な気持ちでそこにいられるのだと思う。なかには通りすがりで入ってきた人もいる。残留孤児だという高齢の男性が中国で関わった人がすべて亡くなり、日本に一時的に帰ってきて、あてもなく歩いているときに、この企画の看板「回復しながら生きる」に魅かれて、階段をあがってきたと言う。ふうふうと息を大きくして入った部屋で、久しぶりの日本をどのようにみたのだろう。

4月17日(火) @ニカイ!文化センター「しんどいと共に生きる — しんどい状況にある人と一緒にいる時どうする?」  
 6月30日(土) @西成プラザ「関わりあいながら生きる — 聞くことと話すこと、その練習」  
 9月17日(月) @大阪ダルク「依存と共に生きる」  
 10月12日(金) @ニカイ!文化センター「問いながら生きる — 境界線/エイズのこと、ジェンダーのこと」

## とらわれず、新たな問いが問われること

講師：倉田めば [薬物依存回復支援団体「Freedom」代表]

### 「えんがわ」でねる猫

うる覚えなのですが「えんがわおしゃべり相談会」のえんがわって、街の人たちもフラフラと立ち寄って、話を聞いたり自分でもおしゃべりしてみるって感じを想像してネーミングされた企画のように聞きました。ところで、えんがわのイメージはもうひとつあります。陽の当たるえんがわで気持ちよさそうに昼寝をしている猫の姿です。以前ラジオ番組で作家の五木寛之が、生きると思うのは、何もしないでえんがわで日向ぼっこをしながらただ寝ている猫でいいんだ、それだけで生きている価値が充分あるんだと話していたことが、とても印象深く頭に残っています。人はどのように生きようと、えんがわの猫のような究極の自己肯定感にたどりつけるなら、それでいいと思うのですが、いくつかの登山のルート of 道筋についてあれこれ思い悩むのがまた人間の業、あるいは生きるテーマでもあるのでしょうか。

わたしは大阪ダルクという薬物依存症から回復していくためのセンターで仕事をしています。今回、2012年9月17日(月)には「えんがわおしゃべり相談会」が西成から出張をして、参加者やコソルームのスタッフの皆さんが東淀川区にある大阪ダルクを訪れてくれました。大勢でしたので、大阪ダルクのデイケアを覗いてもらうのは、ほんの一瞬でしたが、狭いスペースで薬物依存からの回復途上にある仲間たちが、どのように過ごしているのか多少なりともイメージしていただけたかな、と思います。大阪ダルクはどんな所ですか? 毎日みんな何をしているのですか? という質問をよく受けます。「そうですね、午前、午後とグループミーティングをして、ランチは皆で作って食べて、あとの時間はそれぞれ、ゴロゴロ、だらだらしています」とわたしは答えます。この「ゴロゴロ、だらだら」が回復の鍵の一つなのかもしれません。ですが、この日のもう一人の講師・椎名保友さんのお話をうかがいながら考えていたのですが、制度との連携が進んできてそれに合わせようとする、回復にとって本当に必要なものが、ますます部屋の片隅に追いやられ、猫にとっての心地よい陽のあたるえんがわも冷たい暗い影で覆われてしまうのではないかと懸念します。ひたひたと押し寄せてくる開放環境の中で監視システムの巨大化に対抗するには、人が自分自身に正直で居られる場の確保と維持が必要であることは言うまでもありません。えんがわで気持ちよさそうに寝ている猫のヒゲをひっぱるのはやめてくれ!

「えんがわおしゃべり相談会」のようなテーマ設定は、回ごとにまとめあげられ、それなりの結論に導かれるよりも、各回のテーマが、別のテーマと接触したり融合したりしながら、アメーバのように増殖し、新たな問いが問われることの方が重要な気がします。そのような意味において、10月12日(金)のテーマ「問いながら生きる—境界線/エイズのこと、ジェンダーのこと」が今回の企画の最終回であったことは、縦割りの機構やパラダイムに対して穴をうがち、横風を吹かせ、監視不能な新たな連携をこの社会の中に創り出していく可能性をマイノリティが持っていることを暗示しています。参加者の若い方が、「自分らしさ」という言葉に対して懐疑的であるという意見を述べていました。人から言われると「自己責任」と背中合わせのような気がして、胡散臭さを感じてしまいます。「らしさ」という言葉について他人からのコントロールの気配を感じてしまうのですね。

一方、4月17日(火)の「しんどいと共に生きる—しんどい状況にある人と一緒にいる時どうする?」というテーマでは、自分が自分であることの大切さについてお話をしました。アサダワタルさんとのトークではアイデンティティのことも話題にのぼりました。わたしは、28年前に最後の(…今のところです)精神科病院を退院して動物園前にあったアルコール依存症の小さな施設にたどりついたのですが、自分が薬物依存者であることを認めると云う事が回復の最初のステップでした。一日3回参加していたグループミーティングで、自分が話すときには最初に必ず「薬物依存者のめばです」と自己紹介をしてから話します。それを1年365日やり続ければ、薬物依存者というアイデンティティは否が応にも貼りついてしまいますよね。ダルクの仕事をしだすと、職業柄さらに薬物依存者というアイデンティティは強固になっていき、やがて息苦しくなってきました。わたしは、3年ほど前から上田假奈代さんの詩の学校に行って、30数年ぶりに詩を書いたり、旧友の霜田誠二さんにいろいろ教えてもらってパフォーマンス・アートをやったりしています。高校生のころから20歳過ぎまで、色々と表現活動をやろうとしたのですが、なんとなく挫折してそれからは仕事で撮っていた写真は別にして、詩もアートも無関係なところで生きてきました。

2月26日(月) @ニカイ!文化センター「回復しながら生きる — 回復と表現、子どもの頃のこと」  
 5月14日(月) @ニカイ!文化センター「空を見上げて生きる — 宇宙とケア」  
 7月25日(水) @カマン!メディアセンター「誰かと一緒に生きる — 仕事のこと、介護のこと」  
 8月23日(木) @ニカイ!文化センター「迷い考え選びながら生きる — 人生の岐路に立った時に」

## さざ波のような、えんがわ

講師：西川勝 [看護師・臨床哲学]

### 1.このえんがわ相談会について 感じられたことについて教えてください

「えんがわおしゃべり相談会」に講師として4回も出場させていただいたことを、とてもうれしく思います。ぼくの役割は講師というよりも聞き役に近いものだったのですが、参加者のみなさんと一緒に楽しい時間を過ごすことができました。ぼくのお相手をしてくれたのは、ドキュメンタリー作家の坂上香さん、天文学者の尾久土正己さん、なんでも情熱家の槇邦彦さん、編集者の浅野卓夫さん、でした。どの方とも、かたくなしい打ち合わせは抜きにして、ふんわりとのびやかな気持ちでお話できました。カマン!メディアセンターの2階は、いつもほっとする雰囲気、お茶やお菓子も用意されて、夏には団扇もあって、みんなが一緒にいる感じがすてきでした。ときには話の内容が深まって真剣な表情があちこちに生まれたこともあります。また、ユーモアたっぷりの脱線しそうな話にも水を差す人もなく、明るい笑顔で最後まで耳が傾けられました。人の言葉が宙に浮いてしまうことのない充実した寄り合いだったと思います。

### 2.今回のテーマについて、感じたこと、 考えていただいたことについて教えてください

各回のテーマについて、どんなお話をしたのかは細かく思い出せませんが、きつと記憶の底に沈んだことが、今のぼくの見え方や考えにさざ波のように寄せてきているでしょう。いま、ふと浮かんだことを書いてみます。

#### 「回復しながら生きる — 回復と表現、子どもの頃のこと」

看護師として働いてきたぼくは、ナイチンゲールを尊敬しています。彼女のことばに「病気は回復過程である」というものがあります。病む人を外から見れば、とても回復しているように見えなくとも、病む人は病むという生きる姿に回復の足取りを刻んでいるのです。宮沢賢治は、彼の死の前に綴った詩、「眼にて云う」で次のように言いのこします。「あなたの方から見たらずいぶんさんたんたるけしきでしょうが わたくしから見えるのは やっぱりきれいな青空と すきとおった風ばかりです」

#### 「空を見上げて生きる — 宇宙とケア!」

宇宙とケア、はたしてどんな話になるのだろうかワクワクしたのを覚えています。見上げる夜空には、星の光に付き添って、宇宙の全歴史が

私たちに注がれているということ。たとえ人の命はわずかなものであっても、光とともに広大な宇宙に果てなく伝わっていくのではないかと考えてみるとくららするような宇宙ケア論になって興奮しました。

#### 「誰かと一緒に生きる — 仕事のこと、介護のこと」

槇さんとは話し足りなくて、会場を出てからも深夜までお酒を一緒に飲んでいました。一緒にいたくなる人と、一緒に生きることを話せた夜です。一緒に飲んだ「眠り姫」というお店は、深夜も眠らず営業中でした。何かをする手前のところ、共にいるということの意味がわかるには、身に沁みる経験が不可欠ですね。

#### 「迷い考え選びながら生きる — 人生の岐路に立ったときに」

ブラジルの光と瀬戸内海の風を感じさせる人が、サンダル姿でやって来てあれこれ話すうちに、ぼくもどこか遠くへ行きたくくなりました。迷いながら、考えあぐね、でも、自信をもって選ぶところには行きつけなくて、気がつけば、自分を包む風に乗ってたどりついていた。そんな話に、眼を細めて夢見てしまう。自分の足跡を懐かしくありがたく思い返すには、自分の弱さを大事にしないといけませんね。

### 3.参加者とのやりとりや言葉で 印象的だったことはありますか

大学での授業や、どこかの講演と違って、ぼくという人間を見つめてくれている気がしました。普段着で気楽に参加してもらっているけれど、それぞれの暮らしや人生と離れていないところで話を聞いてくれて、そのことに関する自分の考えを話しているありようは虚飾のない美しさに光っていました。

### 4.もう一人の講師の方について、 印象的だったことはありますか

坂上香さん、冒険者的な眼差し。  
尾久土正己さん、まっすぐに伸びた背すじ。  
槇邦彦さん、恥ずかしそうで人なつこい耳。  
浅野卓夫さん、微妙な加減で結ばれる口元。



2月26日(月) @ニカイ!文化センター

## 回復しながら生きる ― 回復と表現、子どもの頃のこと

講師：坂上 香 [ドキュメンタリー映像作家] 西川 勝 [看護師・臨床哲学]

## ぐちゃぐちゃとした輪のなかで

坂上 香

## 少年院で制作された映像を上映する

全国の少年院で、映像制作が行われていることを皆さんはご存知だろうか。2011年の夏、法務省主催のコンペの審査員を依頼されたことで、私はこの試みを初めて知り、驚いた。矯正教育を目的とした少年院という場で、表現活動が積極的に行われていること。しかも映像という方法がとられていること。閉鎖性の高い機関がコンペを行い、さらに一般の映画祭にもエントリーしていること。矯正現場が変わろうとしているのかもしれないと思い、光を感じた。結局予定が合わず審査員は辞退しただけで、上映会をあちこちでやろうと決意した。

その一つがこの「えんがわおしゃべり相談会」の一回目だ。きっかけは、あるイベントで、コッパ代表の上田假奈代さんに、少年院で映像が作られていることを話していたときのこと。ある男性が突然、話に割って入ってきた。

「俺、少年院には詳しい。実際おったからなあ。しかも、全部や。初等、中等、特別、医療。一つや二つなら行ったことある奴ぎょうさんおるけど、全部行ったことある奴って会ったことないなあ。俺は少年院のエリートや!」少年院のエリート!? なんだかすごい。上田さんと私は圧倒され、顔を見合わせた。そして、釜ヶ崎でも上映会をやろうと盛り上がった。講師の一人はもちろん、この自称「少年院のエリート」さん。少年院の職員が映像制作に関する説明をし、少年院を出た当事者が実体験を語り、さらに参加者を交えて語り合う。前代未聞の企画になる、と興奮した。



ところが、である。「少年院のエリート」さんは、忽然と姿を消した。結局、上田さんは、「えんがわおしゃべり相談会」の第一回目にこの上映会をあててくれた。テーマは「回復しながら生きる―回復と表現、子どもの頃のこと」。ナビゲーター役で、私と一緒に講師をつとめるのは看護師の西川勝さん。しかし、全く面識がない。テーマと映像を、イベントと参加者を、それぞれうまくつなげられるか、内心かなり不安だった。

## 流れにまかせてトークを

当日、コッパの量の間で、昼食兼打合せを行った。映像の解説に来てくれた少年院の職員や関係者がちゃぶ台を囲んだ。しかし、多くが初対面だから、ぎこちない。西川さんが、ふいにこんなことを口にした。「少年院がどんなところなんか、よお知らんのですよ。『あしたのジョー』の矢吹丈が少年院に入っつたなあぐらいのイメージやなあ」極度に緊張していた少年院の職員も、場も、一気に和んだ。短時間ではあったけれど、いろんな話ができた。西川さんの、現場で長年つちかかってきた、人と人をつなげる技(マニュアル的なテクニックという意味ではない)を見せられた気がして感動し、西川さんという相方の流れにまかせればうまくいく、と確信したのだった。会場は木製の古い建物の2階。細長くて傾斜のきつい(しかも歩くたびにギンギン音がする)階段の向こうは、すでにぎっしり人で埋まっていた。適度な距離が確保されている教室や会議室とは違って、「誰かさん家の居間」みたいな量の上に、見知らぬ人同士がくっつくように座るというのは、これまた緊張する。ちゃぶ台に並ぶ茶菓をみて、私はやけにホッとした。

## 人生をさらけ出して、固定された関係性をほぐす

薄暗い部屋のなかで、参加者の息づかいを聞きながら映像に目を凝らす。第二部では西川さんのトークに耳を傾ける。いきなり自らの過去をさらけ出してきた。皆、乗り出すように聞き入る。私もその一人だ。そこまでさらけ出されたら、こっちも出すしかない。私は腹をくくって自らを語る。そうしたら、参加者も語る、語る。時間という制約があるから、皆それぞれに制して語ってはいる。それでも、それぞれの人に、そこに足を運ばせた何かがあるのだということを感じさせられるディープな時間だった。相談する人/される人、という固定された関係性ではない相談のあり方。そのヒントがあつた場には存在していた、と思う。その証拠に、ぐちゃぐちゃとした輪のなかから発せられた声や情動や空気感が、今も私の記憶のなかにイキイキと残っている。

## セルフヘルプ・ミーティング 倉田めば

ミーティング場に入る  
どの席に座るかすばやく頭をめぐらす  
スポンサーに毎回できるだけ違う席に座るように提案されている  
今朝鏡をみたら右からのアングルの顔のほうが良かった  
ということは左手にイスのないあの角の席だ  
わたしの他に仲間が9人ほど出席している  
今夜のミーティングではわたしは何番目にクリーンが長いかわ  
仲間の顔を見渡しながら頭の中で指を折る

ミーティングが始まる  
テキストを順番に読み終わり司会者の仲間がテーマを出し  
自らの体験を語り始める  
5分くらい聞いたところで  
今晚の夕食のインスタントの味噌汁が切れていたことを思い出す  
シジミ汁がいいな  
司会者の話がおわり  
他の仲間の視線を空に這わしながらのスピーカーが始まる  
誰か(たぶん仲間)への怒りだろう  
言い回し方が間接的すぎて誰に怒っているのかわからない  
まあ直接的すぎるとマズイ場所ではあるけど  
まさかわたしに対してじゃないだろうな  
思い当たることがないかあれこれ思案している  
妄想の一手手前で

3人目の仲間が話をしている  
視線はテーブルの中央に置かれた  
花の挿されていない小さな花瓶あたりだ  
今夜はハイヤー・パワーが花瓶のなかに降臨しているのかも知れない

わたしは何を話そうか考える  
さっきからズーっと考えている  
隣で話している仲間の声がずいぶん遠くに聞こえる  
何を話そうか考えている自分の声が頭の中でだんだん大きくなってくる

わたしは自分の頭のなかの雑音を聞いている  
わたしがわたしに向かって語りかける言葉ばかり聞いている

手をあげ「アディクトのめばです」と言って話し始める  
話しながら自分で自分の話に酔っていることに気づき  
とりあえず手早く終わらせようとエンディングを急ぐ

話すことが達者になってくると  
その分だけ聞く耳が衰えていく

なにをはなすか  
ではなく  
どうきくか  
が  
回復の鍵なのだろう

ミーティングは音楽だと  
アメリカ人のオールドタイマーが話をしていた

風の音を聴くように  
波の音を聴くように  
小鳥の声を聴くように

いったいいつになったら  
頭のなかの内なる声が沈黙し  
ひとの声をきくことができるようになるのだろうか

## 自己評価の低かった自分

最近気づいたことは、若いころわたしが何をやってもうまくいかない感じがしたのは、ひとつには薬物依存の問題を抱えていたことと、もうひとつは周りでアートをやっている人と自分とを比べて、自分は全く駄目、才能もないし、バカな人間だとか思ってたんですね。極端に自己評価が低かったのです。でも、幸い薬物も長い時間止まって、人との比較に前ほどとらわれなくなると、わりとこのびのびと表現できる自分を発見したのです。依存症からの回復のプログラムというのは、徹底してあらゆるパワーゲームから降りることを説いています。詩やパフォーマンスを始めてから、わたしは薬物依存者という一つのアイデンティティからずいぶん解放されつつあるなあ日々感じています。「自分が一致していく時期っていうのは人付き合いがしやすいけど、完全に一致したときっていうのが、もう一回苦しいですよね」とアサダさんもおっしゃっていました。トークの合間に、アサダさんがギターを弾いて歌を歌い、わたしが詩を朗読したりパフォーマンスをちょこっと披露しました。パフォーマンスをする時間はわたしのなかで言葉が眠るときです。

## 「話したさ」と「黙りたさ」

ですが、人といるときに抑圧感なしに自分の言葉を上手に眠らせるには、技術があるのかもしれない。6月30日(日)雨の日曜日に一緒に宮地尚子さんとお話のテーマは「関わりあいながら生きる ― 聞くことと話すこと、その練習」自分自身の声を聞くとはどういうことでしょうか? 自分自身の声が沈黙するというのはどういうことでしょうか? 自分自身の声が沈黙した時何が聞こえてくるのでしょうか? 話すことと聴くことは、祈ることと瞑想することに通底しています。自分や人の話したさには神経が向きますが、黙りたさをきちんと見つめられることは稀です。宮地さんとのトークでは沈黙の園に潜んでいる妖精の存在になんとなく気づかされました。沈黙を恐れないで、という言葉にはほっとさせられます。薬物依存症の自助グループのミーティングは原則的に、言いつばなし聞きつばなしです。話したくなければ聞くだけでよいと云う事が最初から保証されているのはとても安心できます。宮地さんがおっしゃるように話をしたり聞いたりするときに正面から向かい合うのではなく、直角の位置に座り合うというのは、相補的な関係をとりやすい気がします。ダルクのパフォーマンスでも、回復に必要な割合は、聞くこと80パーセント、話すこと20パーセントと云われています。わたしの経験でも、自分の頭の中の声を聞くことをやめて、人の声が耳に入るようになってくるときは、自分からずいぶん解放されている感覚があります。



3月25日(日) @ニカイ文化センター、釜ヶ崎のまち

## 一歩はみだして生きる — シングルのまち釜ヶ崎まちあるき

講師：原口 剛 [地理学者] イダヒロユキ [「ユニオンぼちぼち」副委員長]

### 気づきのえんがわ

原口剛

#### 1.このえんがわ相談会について 感じられたことについて教えてください

えんがわ相談会には以前から機会があれば参加させていただいていますが、釜ヶ崎に住む人から初めて釜ヶ崎に来たという人まで、いろいろな人が参加して集い、思い思いにしゃべる、耳を傾ける。小さな場ですが、ふだんであれば出会えないような人と出会うことができる、とても大きな意義があるんじゃないかと思います。職場と家を往復するだけではなかなか見えない、地域の生きられた記憶や、生きることの価値のようなものに気づくことができる場、なのではないでしょうか。

#### 2.今回のテーマについて、感じたこと、 考えていただいたことについて教えてください

「釜ヶ崎」というまちは、どのようなテーマの企画で、どのような見方や歩き方をするかで、違った見え方がするのだなあ、と、あらためて思いました。「シングル」というテーマで歩いたのは今回がはじめてで、なるほどこういったテーマをもちながら歩くといろいろな釜ヶ崎の表情がみえて、僕自身、とても新鮮な気持ちで参加しました。

#### 3.参加者とのやりとりや言葉で 印象的だったことはありますか

釜ヶ崎に初めて来たという人も、なじみの人も、みんな真剣な表情で語っていたのがとても印象的でした。だれかの言葉を聞いているうちに新しい論点が生まれて、そして語りがつぎつぎ広がっていく、というような雰囲気が生まれていました。最後のほうでは僕も思わず、なぜか自分自身の個人的なことまでしゃべっていたように思います。

#### 4.もう一人の講師の方について、 印象的だったことはありますか

イダさんと釜ヶ崎をあるくのは初めてだったのですが、「シングル」というあり方について深く考えて来られた方ということもあって、歩きながら口にされる言葉のひとつひとつが、とても印象的だった、というか、なるほどこういう見方もあるのかと勉強になりました。それから、参加者の話を引き出すのがほんとにうまいなあと、しみじみ思いました。最後のほうは、イダさんを中心として参加者との車座の座談会のようなかたちになったのですが、僕は直後に行かねばならないところがあったので途中で失礼しなければならず、それがとても残念でした。



2011年、コカールムに集う人たちとまちを歩き、作った地図です。

### 「シングルのまち釜ヶ崎まちあるき」 を思い出して

イダヒロユキ

#### 1.このえんがわ相談会について 感じられたことについて教えてください

釜ヶ崎のまちの端っこだまで行って、ここが「遊郭」世界と外の世界を分け隔てる“壁”のあった場所なんだと実感しました。歩きながら感じるのは面白い。

#### 2.今回のテーマについて、感じたこと、 考えていただいたことについて教えてください

「釜ヶ崎には、男性の独り者、独身者が多い」というのは、無意識に、当然のように感じていたけど、それ以上考えていなかった。でも、それは家族を持っていない、恋人がいない、家族を捨ててきた、断ち切らざるを得なかった、などなどのいろいろな事情の塊の結果だということ。そして、そこから孤独、さびしさや性欲の問題があり、「遊郭」や飲み屋はそれと一体になって発達したのだということを改めてつなげて、思いました。貧困で逃げられない壁、病気で死んだ人、子どもを墮胎した人、いろいろな人の苦悩が少し垣間見れた街歩きでした。

僕は、少し、シングル単位の観点で、結婚や人生を考えたら、という話をさせてもらいました。現実的に言って、結婚できない状況の人にとって、結婚や家族は故郷のように遠くに思うものなんだろうと思ったし、「遊郭」や飲み屋があるのは、一つの「現実的な答え」だと思いました。一人で生きること、避けようなくこの社会の一つの在り方であるし、そこにも喜びや希望もあります。さびしさや困難があるのは、家族がいてもあるわけで、人それぞれ、状況や考え方や性格や努力や運次第ということだと。

#### 3.参加者とのやりとりや言葉で 印象的だったことはありますか

時間がたっただけで覚えていません。すみません。ただ、はじめて釜ヶ崎に来た人がいたこと、人の感覚がそれぞれだということ、付き合っていると公表することの意味などを少し考えた記憶があります。カップルだからといって考えが同じというわけでもないかと改めて思ったし、付き合うといつても深い浅いもあるとも思いました。



#### 4.もう一人の講師の方について、 印象的だったことはありますか

原口さんが、まちのことだけでなく、人のことを語り、自分のことを語っていたような気がしました。うろ覚えだけど、よく知っているなあと感じました。ここにひきつけられている人なんだろうなと思いました。そんな人が、大学の正規教員になると聞いて、やっつけののかなあと思ったのを覚えています。自由であったりみ出したり過剰である人だからこそ、釜ヶ崎とシンクロしたのだろうし、それが、つまらぬ場所に成り下がってしまった大学というシステムと合うのかなと思っています、でもそんな人だからいい研究者でい続けるかもしれない。また今度聞いてみたいです。人の息遣いが聞こえる研究者なので原口さんの話は面白いです。



4月17日(火) @ニカイ!文化センター

**しんどいと共に生きる—しんどい状況にある人と一緒にいる時どうする?**

講師：アサダワタル [日常編集家] 倉田めば [薬物依存回復支援団体「Freedom」代表]

**多方向の縁側から話を進める  
ことができるえんがわ**

アサダワタル

**1.このえんがわ相談会について  
感じられたことについて教えてください**

自分の話題提供も含めて自分自身もこの場になんで存在しているかをあれこれ考えるような企画。縁側の意味は広く、マージナルな場に寄り添って、あるいは寄り添わざるをえない人たちが各々の境界からこの場に集まってきたんだろうなあと。

**2.今回のテーマについて、感じたこと、  
考えていただいたことについて教えてください**

正直、「これ自分が話しているテーマなのか」と戸惑いはありましたし、会が進行する上でもその戸惑いは残った。でも、その居心地の悪さは自分にとって「よかった」と思っている。名付けのないような何かを抱えた当事者という立場と、社会的に名付けられた問題を抱える当事者の間に、自分の考えを「言葉にすること」の隔たりを感じた。ココルームという場は、もちろん後者も受け入れて来ているけど、ココルーム自体が結果的に前者の立ち位置の当事者になっている。だからこそ、多方向の縁側から話を進めることができるのかと。参加していた知人が終わった後に、「なんで、このテーマにアサダくん呼んだん?」と聞いたことに対する、この企画の立案者である植田裕子さんの答えは、「こういう話をする時に一緒にいてほしい、共有してほしい人」というものだった。

た。僕自身がそうであるかどうかは置いておいたとしても、納得できる。つまり解決するのではなく、「並走する」ことの意味を知る場。しかしその場が同じメンバーだけで成り立ってもまた徐々に、並走できなくなることもあるだろうから、そこに留まることと去っていくことのバランスは「しんどい」と付き合うという意味において、他人の「しんどい」であっても自分の「しんどい」であっても、難しい。それはパズルのようにはうまくいかない。しんどい人と聞いてあげる人の二者関係だけでは埋まらない。寂しいかもしれないけど、強固な二者関係だけでなく、めばさんの言葉を借りれば「たくさんの中にいる能力」「全然知らないコミュニティにぼつんと行くことも大事」。このあたりはすぐグルグルと考えてしまう。

**3.参加者とのやりとりや言葉で  
印象的だったことはありますか**

よてつさんの「解釈からくるしんどさ」と「物語の力」。そして、どなたかが言った「複数で支える」ということ。そして、椎名さんの「あきらめ」ということ、ここからは僕の解釈だけけどその「あきらめ」から逆算して(そんなんなかなかできないんやけど)どこまでだったら寄り添えるのかを見極めて行くことなど。これもやはり考えざるをえません。

**4.もう一人の講師の方について、  
印象的だったことはありますか**

言葉というか、もう存在が印象的でした。実はまともにお話するのが初めてだったので。ライブとトークの行き来の仕方は、表現というものを「武器」だけにしていない、ある種「毒」にもしている経験をされている印象を勝手に強く持った次第です。

5月14日(月) @ニカイ!文化センター

**空を見上げて生きる—宇宙とケア!**

講師：尾久土正己 [和歌山大学教授] 西川 勝 [看護師・臨床哲学]

\* 尾久土先生が骨折のため原稿を書くことができず、上田假奈代がレポートしました。

**宇宙と釜ヶ崎**

2009年6月、日本ボランティア学会南紀熊野大会でパネルディスカッションに登壇されていた尾久土正己さんのプレゼンに、こんな天文学者がいるのかと衝撃をうけた。宇宙が地域社会にどんな風に関わるかを真剣に考える態度を持つ天文学者に、学会終了後「釜ヶ崎に来てください」とお願いした。その冬に「釜ヶ崎と宇宙—クリスマスの釜ヶ崎の夜空をみあげる」が実現した。尾久土先生の半生、宇宙との出会いや病気、挫折、けてして順調とは言えない凹凸の道を歩いてきた人生が率直に語られる。何十年も何百年も前に発せられたという星の光。いまこの瞬間に過去がまじっているという感覚に、こころがほぐれる。そして、尾久土先生から望遠鏡を持って行くからみんなで夜空をみようと申し出があり、以降毎年二回、三角公園で星をみる会を続けている。

**宇宙とケア!**

そのあと、尾久土先生がオーストラリアではやぶさ帰還のネット中継を行なったとあって、ココルームやおっちゃんたちの間ではやぶさ熱がおこった。ココルームで事件が起きしょんぼりしていたときに先生から「はやぶさの勇氣はこの大気に溶け、(わたしたちは)その空気を吸っている」とことばが届き、みんなで深呼吸をした。尾久土先生から届けられる宇宙のお話にわたしたちの現場は励まされる。同時におっちゃんたちが望遠鏡をのぞき発することば・表情に天文学者は励まされたと言う。こうした関係をケアという見方もできるのではないかと。今回、西川勝先生というケアの専門家といっしょに話をしてもらいたいと企画をすすめた。

**夜空には過去が見えてる。自分の過去も空にある**

尾久土先生と西川先生、どちらが哲学者か天文学者かわからない。初見とは思えない深い対話がはじまる。地球が46億年前にできたことから、わたしたちの苦悩も幸福も、人間関係もそこからはじまった。西川先生が重ねる。「宇宙とケア。なぜ私が、という時に理論でなんとかしようと思ったってどうにもならない。人間関係で人間のことをケアするっていうのではなく、空を見るとか、歩くとか。救ってほしいとか、救いたいとかの欲とは違うところ」「夜空、いろんな過去が同時に見えている。いろんな過去が届いている。あまりに遠いから遠近がわからないけど。降り注いでる光。ものすごい歴史が一気に光となって自分に注がれている」。尾久土先生は釜ヶ崎に来る前に、知り合いの看護師から

頼まれて、プラネタリウムに行きたかった末期癌の患者さんの病室に行きお話をすることになったそうだ。星が繰り返す生と死の話をし、その患者さんはすこし元気になり2回目の講座のあと亡くなった。「星を見るとか宇宙のことを考えると。誰に対しても一幸せな人、元気のない人、そうでない人、どんな人にも通じる話なんだな。世界の真理を話しているだけなんだな」と尾久土先生は話してくれた。

**日食観測用メガネ工作と死刑**

牛乳パックを使って、大阪で280年ぶりの日食を観測するためのメガネをつくった。

わたしは死刑が確定した人の話をはじめた。「独房から見えていた月。部屋が変わり月が見えなくなって残念に思っているその人に手紙を書きたいのだが、なんと書けばいいのかわからない」。すこし沈黙があった。尾久土先生は「その人にもいろんな未来があっていろんな思い出があって、思い出したくないものもひっくり返して、今何光年くらいのところまで行ってるよ。その人がいたっていうこと、書類の中に残るけど、それ以上にこの宇宙にいたっていう方がよっぽど大きな意味があって、この宇宙にいたっていうことが加害者被害者ともに、みんな同じ宇宙の一部なんですよ」。西川先生は「人間が死刑にして閉じ込めても、そういう過去をこの宇宙から消すことはできないんだ」と重ねた。日食の朝、釜ヶ崎ではおっちゃんたちが路上で歓声をあげていて、わたしたちはめいめいの場所で観測用メガネで日食を見た。「誰の上にも平等に空がある」尾久土先生のことばを思い出す。



日食の大阪の朝の空



6月30日(土) @西成プラザ

## 関わりあいながら生きる — 聞くことと話すこと、その練習

講師：宮地尚子 [精神科医師] 倉田めば [薬物依存回復支援団体「Freedom」代表]

## 言いよどみや沈黙の時間を大切にしているえんがわ

宮地尚子

1. このえんがわ相談会について  
感じられたことについて教えてください

こじんまりとした、アットホームな感じでよかったです。ひびきにディーブな関西でした。

コルールの日頃の雰囲気が垣間見えました。環状島という私が作ったモデルや、トラウマの語りづらさというものを、いっしょに考えてもらえてうれしかったです。

2. 今回のテーマについて、感じたこと、  
考えていただいたことについて教えてください

関わりあいながら生きる、というのは、コルールのありかたそのものですね。

聞くことと話すこと、というのは、大学のようなところにいるとできてあたりまえなんですけど、教員も学生も、本当に相手の言葉を聞いているのか、本当に自分の言葉を話しているのか、という疑問だなあ、とつくづく思いました。

練習というよりも、学び直し、学び落とし(アンラーニング)が必要なのかもしれません。

上田さん、植田さんたちが釜ヶ崎という場所で紡いでいる関わり、めばさんたちが依存症のミーティングで紡いでいる関わり、それらは、すぐにもほげそうだからこそ、貴重なのだと思います。暴力とか、恥とか、うらみとか、あきらめとか、緊張とか、ちょっとした行き違いの中から生まれる予想外の展開とか。そういうほげそうなところを、大切にしていきたいですね。

3. 参加者とのやりとりや言葉で  
印象的だったことはありますか

最近物忘れがひどくて、すっかり忘れてしまっているのですが(汗)、みなさん、居場所を大切にしているなあと感じたこと、言いよどみや沈黙の時間を大切にしているなあと感じたことは覚えています。

相談会の後、飛田新地をこっそり歩こうと思っていたら、結局みんなで行くことになってしまい、焦ってしまいました。ばらばらになって歩きまし

たが、何とも言えない緊張感でした。それは、まさに「聞くことと話すこと」を禁じられた空間だからだなと思いました。外に開かれているようにみえて、閉ざされている空間。関わりながら生きていくはずなのに、どこから監視されていて、女だからこそ、歩きにくい街。見えない分断線があって、自分だって、いつ「おんなのこ(おねえさん)」や「曳き手のおばさん」とこっそり入れ替わっていてもおかしくないのに、彼女たちと言葉を交わしにくい街。

今度はあそこの路地で、えんがわおしゃべり相談会ができればいいなあ、と夢想してみたりします。

4. もう一人の講師の方について、  
印象的だったことはありますか

めばさんはいつもめばさんで、ほんわかふわふわ、でも、どっしり存在感があって、大好きです。ミーティングの話、嘘言っても、隠しても、10分の1だけしゃべっても20倍くらいにしゃべっても、それでいい、ということ。「あらざらい正直」でなくていい、というのがおもしろかったです。

めばさんのパフォーマンスも見たかったなあ。



7月25日(水) @カマン!メディアセンター

## 誰かと一緒に生きる — 仕事のこと、介護のこと

講師：榎 邦彦 [コマイナース] 西川 勝 [看護師・臨床哲学]

## お茶をついだり相づちのえんがわ

榎 邦彦

1. このえんがわ相談会について  
感じられたことについて教えてください

貸し出されたうちわを扇ぐ音、少しぬるくなった麦茶、蚊取り線香と汗の混じった匂い、座布団を譲り合う初めて出会う顔、そんなどこかしら懐かしさを伴う居心地の良さと、商店街の通りから覗き込まれる視線を感じる半開放性の場が、ゆるいつながりの中で濃密になり過ぎないおしゃべりをするのにはちょうどいいなと感じました。

2. 今回のテーマについて、感じたこと、  
考えていただいたことについて教えてください

巷の貧困問題や若者の就労の状況など、自分が見てきたことを手がかりに、自分の言える範囲のことを誠実に答えていこうという心構えで望みました。と言えば聞こえはいいかもしれませんが、結局のところ丸腰の出たとこ勝負。事前になんの準備もしていませんでした。少し長めの自己紹介をさせてもらった後、参加者の方たちの声は「仕事」について何か聞きたいというよりも「仕事」を窓口にして自分の事を語っているという印象を受けました。僕は特に振られることがない限り口をはさめず、少なくともお茶をついで回ったり大きめに相づちを打つくらいで講師っぽいことは何もしてなかったように覚えています。その感じがとても良いなあと感じていました。僕が手を抜けるから、とかそういうことでもなくて、こんな場を社会の中にたくさんつくっていくことが自分自身の仕事だったのではないかな、みたいなことを考えていました。

3. 参加者とのやりとりや言葉で  
印象的だったことはありますか

通りがかったおじさんが以前コルールのスタッフに世話になったお礼(古いバイクの部品をインターネットで調べてくれたとかそんな話)を言いに来られてそのまましばらく輪の中に加わり、自分の生い立ちや故郷のことを語り始めた。今回のテーマとは外れるかもしれないけれど、このおじさんの話をみんなで聞くのも悪くないなあと思っていたら、「わしの話ばかりするところとちゃうかったな、すまんすまん」と退席された。これは西成ならではの雰囲気、この「えんがわ」という場の設定にあるように思いました。

4. もう一人の講師の方について、  
印象的だったことはありますか

「哲学の用語や、誰かの考え方を引用するのはなく、自分の言葉で考えればいい。みなそれぞれに現場があるのだから」と言われたのは覚えてます。

あと二つ三つさすが!と思う場面があったはずなのですが、えーっと。会が終わったあと、釜ヶ崎で終電過ぎまで二人で飲んで、すっかり酔っ払いまして、その夜に話した記憶は、帰り道の自転車に乗って口ずさんだ鼻歌と共に夏の夜風と消えていきました……。

8月23日(木) @ニカイ!文化センター

## 迷い考え選びながら生きる — 人生の岐路に立った時に

講師：浅野卓夫 [サウダージブックス] 西川 勝 [看護師・臨床哲学]

### 「迷い考え選びながら生きる」 人生と仕事と

浅野卓夫

#### ことばに耳を澄ませる

多くの参加した「えんがわ相談会」のお題は、「迷い考え選びながら生きる」。話題があちこち飛んで、話の行方も迷子になりそうでしたが、熱心な聞き手に支えられて普段なら話さないようなことを話しましたし、いろんな気づきの種をもらうことができました。もう一人の講師である西川勝さんはじめ、ココルームやカマン!メディアセンターに集うみなさんとの出会いにふかく感謝します。

本作りの仕事、とくに「編集」という仕事の現場から、「迷い考え選びながら生きる」というテーマについて、みなさんに話を聞いていただきました。ぼくには本作りの仕事に就くまえに、挫折して人生に迷う時期がありました。それに編集という仕事自体が、「迷い考え選びながら生きる」という表現がふさわしい、何だかつかみどころのない職業です。

人を感動させるような文章を書くことは、ぼくにはとてもできません。活字や装丁のデザインをするわけでもありません。印刷や製本の熟練した技術はないし、書店で本を販売し、多くのお客さまに一冊を紹介するノウハウも知らない。編集者とは、まったく無力な空っぽの存在で、できることといえばただひたすら原稿を読むこと、ことばが、文が、どんな本のかたちになろうとしているのか、その願いにじっと耳をすませること。まさに十字路にひとり立ちつくと、どっちに行けばいいんだろう、とつねに「迷い考え選ぶ」仕事。この10年ぼくがやっているのは、本当にただそれだけ。悩みは尽きません。

#### 風の声が聞こえてくるとき

臨床哲学の先生であり、長いあいだ看護や介護の現場に関わって来られた西川勝さんのお話が、心にしみました。

考えて考えて悩んで悩んでことばを尽くしても、自分のなかに答えが見つからないことって、あるでしょう。そんな心の空白地帯に立ちつくと、でも、風が吹いてくるんだな。それは、他人の何気ない一言を乗せた風。それが、岐路に立つぼくらの背中を、ふっと押し出してくれる。悩みぬいて悩みぬいて、はじめて、風の声に耳が開かれる、まあ、そんなものなんだよね。

ああ、そうだな、と心のなかで大きくうなずきました。これからぼくは、「迷

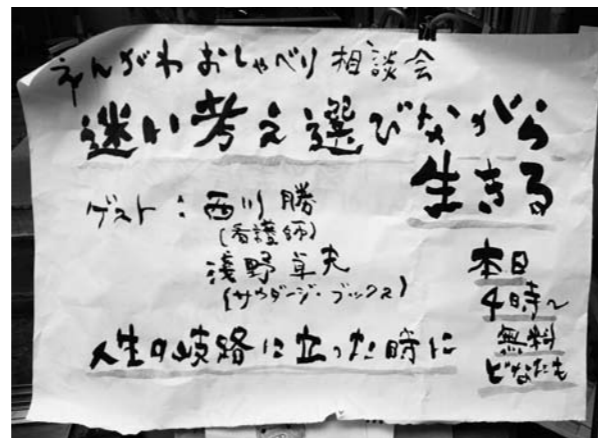
い考え選ぶ」というやっかいな道を歩いていくのですが、西川さんのおっしゃるこの「風の声」を信じればこそ、「生きる」ということができるのだらうと思います。

#### 尾崎放哉が残した詩

さて、ぼくが現在暮らす瀬戸内の豊島のとなりに、お醤油やおリーブで有名な小豆島があります。小豆島の西の玄関口である土庄本町には、1925年に島で没した放蕩の自由律俳人、尾崎放哉の記念館があります。「咳をしても一人」「障子をあけて置海も暮れきる」などの前衛的な作風で知られる放哉は、「迷い考え選びながら生きる」、そんな人生を体現した人でした。

年下の妻に見限られて海にとびこんで死んでやる、と文無しで乗り込んだ小豆島で、結局最後は海にとびこめないほど酒に溺れて衰弱し、お寺の和尚さんや近所の漁師さん夫婦の無私の介護を受けて亡くなりました。恥も外聞もなく、借金と酒をせびりまくる迷惑な文学者をお遍路の伝統をもつ土地の人びとは、困惑しながらもお接待の精神で迎えられました。

晩年の放哉は何ひとついいことをしませんでした。でも、すばらしい「詩」を未来に残してくれました。じつは、相談会のあとの打ち上げの席で判明したのですが、今回お会いするまで何の接点もなかった西川さんとぼくは、ともに尾崎放哉の熱烈なファンであり、人生の岐路に立ったとき、放哉の句にあの「風の声」を聞いてきた、そんな体験を共有していたのです。西川さんとの対話は、どうやらこれからも続きそうです。つながるとき、人はこんなふうにしてつながるんだな、としみじみ感じた大阪の夜でした。



9月17日(月) @大阪ダルク

## 依存と共に生きる

講師：椎名保友 [NPO法人「日常生活支援ネットワーク」コーディネーター] 倉田めば [薬物依存回復支援団体「Freedom」代表]

### そこに集まれる場えんがわ

椎名保友

#### 1. このえんがわ相談会について 感じられたことについて教えてください

えんがわ相談会はとても愛おしいです。

2年前にも「支援」というテーマで3回<聞く側>を。様々な分野の現場で人と向き合う仕事をしているみなさんが、切実に悩みながらも、体験されていることや感じていることをそれぞれにしばりだせるえんがわ相談会。

<聞く側>としてその場に出てくるお話しと向き合い、自分なりの感触やそこから思うこと、伝えたいということを言葉にしてきました。反面、自分なんかでよかったのだろうか? と申し訳なさとも葛藤しております。今回もそれぞれの分野での現場で葛藤されているみなさんと、僕も葛藤を抱えつつも車座になりました。

でも、えんがわ相談会のこの時間が愛おしくて仕方がないですよ。…だって襟を正して裸の自分や他人と向き合えるような真摯な時間ってそうないでしょ?

もっともっと<話せる・聞ける>場って、必要ですよ。

#### 2. 今回のテーマについて、感じたこと、 考えていただいたことについて教えてください

畏かったです。今回は「依存」というテーマで倉田めばさんと。しかも会場は大阪ダルク。

まず「依存」というテーマへの知識や経験が全くなく、このテーマやめばさんという人物、ダルクという場や活動、当日来られるみなさんどう向き合えばいいのだろうか…半年間、真剣に悩みました。

ただ決めていたのは、本を読むなどの予習をしない。知ったような言葉や付け焼刃な言葉を使っはけない。

わからないからこそ失礼がないように、えんがわ相談会という試みと向かいあわなければということだけを意識して、当日を迎えました。

<居ること>がきっと一番大事なことなのかな? 本当はそれだけでいいのに、今回いっぱい考え過ぎだし、構えてしまっていたことは反省です。

#### 3. 参加者とのやりとりや言葉で 印象的だったことはありますか

ごめんなさい、ちょっとズレたところから話をさせてください。

実は、僕は会の途中で<自分なんかいるべきではない>っていう気持ちになって、席から立ち上がって、会場の隅の廊下に逃げてしまったんですよ。この日集まったみなさんは様々な現場で当事者と関わってきている方ばかりでした。この「依存」というテーマへ深く関心を持たれ、大阪ダルクの活動やめばさんの姿勢に共鳴されていくなかで<自分なんか>という気持ちと会場のみなさんがどんだん前のめりになっていく空気を醒めた目で見たくなり、いったん逃げることにしました。

みなさんの正面から人と向き合う姿勢に勇気を感じました。反面、お互いが抱えている繊細な葛藤を数多く感じました。

僕があえてみなさんに投げたのが「影響力の行使」。

対人職であるからこそ持ちあわせる言葉や距離感、関わり方…そこには良くも悪くも影響力が発生し、僕も含めてこの影響力を行使することでメンを食べている。

そのことへの自覚や覚悟について、みなさんと急にお話しをしたくなったんですよ。

#### 4. もう一人の講師の方について、 印象的だったことはありますか

めばさんの言葉で一番重かったのは「ただ19年間それをやっているだけ」。

これは大阪ダルクが1993年よりずっと毎日かかさずやっている1日3回のミーティングのことなのですが、この言葉って同じ福祉職としてずっと感じました。

プログラムが人を変えるんじゃないですよ? そこで出会う人に変えられるし、変わらなかったら駄目なのか? そうじゃないですよ。

その人が変わることと依存をやめることが=(イコール)じゃないんだ。そこに集まれる場があって、そこでしか出来ない話もできる。ただただそのことを大切にされているめばさんの姿勢が印象的でした。



10月12日(金) @ニカイ!文化センター

## 問いながら生きる — 境界線／エイズのこと、ジェンダーのこと

講師：山田創平 [社会学者] 樋口貞幸 [NPO法人「アートNPOリンク」常任理事] 倉田めば [薬物依存回復支援団体「Freedom」代表]

### 当事者性とえんがわ

樋口貞幸

#### 〈えんがわ〉のさすもの

じつのところ、〈えんがわ〉という言葉にピンと来ていなかった。緑台の間違いないかな? と思っていた。我が家や祖父の家、親戚の家にある縁側は、どちらかというと、家の奥まったところで、裏庭に面したところにある。通りには面しておらず、極めてプライベートな空間だ。夏場はよしずを立てかけ、部屋着のまま涼を取る。縁側を通して中と外を出入りすることはできても、出入りすることができるのは家族だけ。しかも縁側の前に広がる裏庭は、我が家の延長にあった。他人様が、縁側から出入りすることは許されていないし、客をもてなすのに縁側を使うこともない。そうそう、縁側から何か物を出し入れしようものなら、玄関を使いなさいと叱られたものだ。唯一出し入れできたものといえば、洗濯物や布団、あるいは掃除機に溜まったゴミなど、至極プライベートなものだけだった。玄関や裏玄関(勝手口)のように土足で入れる場所(祖父の家の台所は土間だった)と違い、縁側に土足であることはない。建築的には内でもなければ、外でもないといわれる縁にある存在(現在は完全に家の中に含まれていてあまいさは感じないが)だが、その存在のあまいさに比べ、目に見えない明確な境界がしっかりとあって、使い方はとても厳格だったように記憶している。玄関には玄関の神様が、裏玄関には勝手口の神様が、縁側に宿っている神様は、玄関のそれとはまた違うのだという感覚をもっていた。そのように、厳格さをもった空間として認識しているせいか、縁側を〈おおよけ〉と想定して話しをするということにピンと来なかったのだ。

「えんがわおしゃべり相談会」となづけられたこの一連の企画は、どれもこれもとても公的なテーマが設定されている。いや、よくよく考えてみると公的なテーマに見えて、じつは限りなく個人に帰結するトピックなのだ。個人の内面に帰結する問題を〈おおよけ〉に話すことと捉えれば、縁側でこそこそひそひそと誰か別の人に話す姿は案外しっくりくることに気付く。

わたしたちと与えられたテーマは「問いながら生きる — 境界線／エイズのこと、ジェンダーのこと」。ほかの対話者である倉田氏、山田氏は、当事者性を自覚し、すばらしい活動をしている尊敬に値する実践者たちである。それに比べ、エイズやジェンダーが専門領域でなく、それらについて実践しているわけでもないわたしがここで発言できるとしたら、内面をさらけ出すことか、あるいはとても上っ面なことや伝聞をならべるこ

とのどちらかだ。当日は、心の準備が伴わず(といえば聞こえはいいが)、結局は後者をとった。

#### 「カミングアウト」の前と後に

内面をさらすことを避けた自分の葛藤とは別に、会はずーに進出し、とても興味深い話題が交わされた。来場者からいくつか質問があったなかで、「カミングアウト」についての質問に興味があった。エイズであれセクシュアリティであれ、たとえば出自や民族、宗教であれ、なにかしらの「カミングアウト」を要請させられる。「カミングアウトを要請する」とはどういうことだろうか。「カミングアウト」とカタカナでネット検索すると、日本に住む同性愛者のブログやコメントが真っ先にヒットする。そこには、なぜカミングアウトしなければならないのかという異議申し立てもあれば、カミングアウトされた側のトラウマも出てくる。ハッピーなカミングアウトもあれば、失敗談もある。「自分が少数派の主義・立場である事実を公表すること」(はてなキーワード)という定義もヒットする。いずれにしても、カミングアウトに悩み、戸惑い、苦悩する姿が噴出している。なにかしらのマイノリティを自覚する当事者には、ただ単に好奇心から要請されるカミングアウトやあるいは社会的立場を明らかにさせようとする規範によって強要させられるカミングアウト、逆に共感を得ようと願って自らおこなうカミングアウトなどによって、失意と苦い経験をしてきた者も少なからずいるだろう。もちろん、虐げられること、分断され孤立することへの恐怖からカミングアウトしないと決心している者も少なくないだろう。

6月に開催された同企画に「関わり合いながら生きる — 聞くことと話すこと、その練習」と題した会があった。そこに登壇された倉田氏のおっしゃったことが印象に残っている。(発言の文脈は異なるかもしれないが)「カミングアウトすることによって、権力を持ってしまう」。なるほど、そういうこともあるだろう。カミングアウトすることによって、さまざまな当事者との結節点がうまれるかもしれないが、一方で、分断／孤立を生み出すこともある。それはカミングアウトした発話者の責に帰すことではないはずだが、全ての人がマイノリティであると正論をぶっこいてみても、そんなことは認識されているとはいえないし、自覚したことのない者にとっては、マイノリティは自分とは異なる者でしかない。

じつは、「問いながら生きる — 境界線／エイズのこと、ジェンダーのこと」は、そのようなセンシティブな心の痺れや目の前で引かれてしまう境界線への恐怖について語ることであり、当事者性を自覚しない者いかに当事者たることを認知せしめんとするパフォーマンスでもあったように思う。

### 空間や世界の共有としてのえんがわ

山田創平

1. このえんがわ相談会について 感じられたことについて教えてください
3. 参加者とのやりとりや言葉で 印象的だったことはありますか
4. もう一人の講師の方について、 印象的だったことはありますか

(上記1、3、4について)

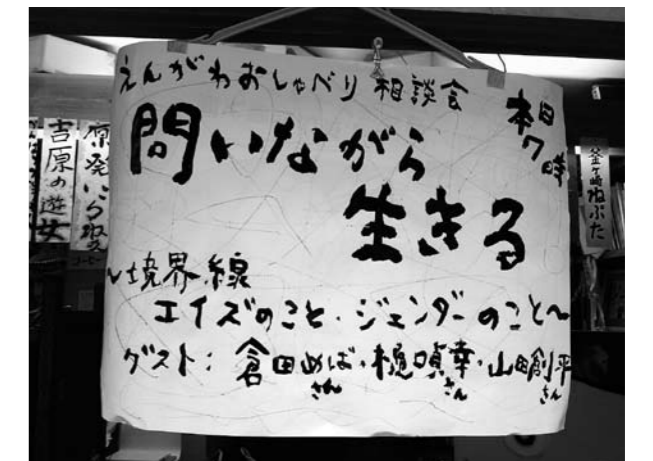
今回「えんがわ相談会」が開かれたこの場所は、私自身が関わるエイズ予防プロジェクトの主要な活動フィールドでもありました。この場所で、今回のようにアートを大きな柱としつつ、人々の生のありようについて話せたということは、私自身にとっても大きな経験でしたし、私自身の人生にとっても何かひとつの区切りのように感じられました。

「日本」と呼ばれるこの弓なりの列島の中で、現在HIVに感染する人々のほとんどはゲイ・バイセクシュアル男性ですが、大阪地域のゲイコミュニティの中でもこの新世界・今宮周辺のゲイコミュニティは年齢層も高く、また雑誌やインターネットなど主要なゲイメディアとの接点も薄く、社会的に顕在化しにくく、極めて独自の文化的な成熟をみる閉域のため、HIV感染予防の情報も伝わりにくいです。その結果として起こる人々の実存に関わるさまざまな事柄、悲劇的な出来事を多く目にしてきました。今回この場所で話をしつつ、不思議な感覚ではありますが、すでにこの世にいない多くの人々に対して話をしているような気がしてなりません。参加された皆さんと、他のゲストの方々との対話も、ゆっくりと流れる川のように、そのような思いをさらに強くしました。

話をするという行為は、言語の表面的で記号的な意味の共有とは異なる、空間や世界の共有をおそらく同時に意味するのでしょうか。わたしは皆さんと話しながら、自分がいまここでこのような話をしているという巡り合わせを心から不思議に思いました。参加者の皆さんからもさまざまな発言がありましたが、私の発言や問題提起に対して、みなさんが真摯に回答してくださったことがたいへんうれしく感じられました。今回、私自身も個人的なことがらを多く話しましたが、そのようないわば応答の難しい表明に対しても、多くの方からまっすぐで率直な反応を頂けたことが印象的でした。

2. 今回のテーマについて、感じたこと、 考えていただいたことについて教えてください

私は「エイズ」や「ジェンダー」といったテーマが、開かれたさまざまな場所で語られるということ自体に大きな意義があると考えています。「エイズ」の現場では、セクシュアリティに関する言及は盛んですが、ジェンダーに関する議論は希薄ですし、「ジェンダー」が議論される場では、基本的にゲイ男性の問題であるエイズに関してはあまり注意が払われません。今回、アートを媒介とすることで、多様な領域の交差的な対話が可能になるのだということを改めて実感しました。





参加者と講師のおしゃべり記録より

\* ■は対話として続いていることを表しています。

2月

回復しながら生きる

一 回復と表現、子どもの頃のこと

◎（法務教官の方から）自分が担当した子どもが社会に帰って、良くない状態になっているのを目の当たりにした時に、自分には何もできることは無いかなと痛感する。でもこういう場所で集まって、分野は全く違うのにおなじ話をして、つながっているのを実感できたので、いろんな分野で子どもたちに関わる大人がいることが必要だなと感じた。

◎とても大きな事件が起きて、私たちはどうしたらいいんだ、命もよみがえらないし、修復しようがないという時に、どうしようもないかもしれないけど、じゃあ社会がどうい社会だったらいいの、というのを考えるきっかけに、こういう場になるかもしれない。今日のような場が続いていいたら、ひょっとしたら死刑が無くて違う対応の仕方であらう問題に対応できる、そんな社会がつかれるかもしれない。

◎回復というのは病気になる前に戻ることでは無い。病気になる前に戻ったらまた病気になる。けれど元に戻る訳じゃないし、病気だとか、それから様々な普通マイナスといわれる事柄もそこを含み込んだうえで、違うあり方になるっていうふうになれば、病気は決して無意味ではない。◎僕たちは、自分が何者なのかということ、自分が傷つけた人の顔と出会うなかで思い知らされる。

3月

一歩はみだして生きる

一 シングルのまち釜ヶ崎まちあるき

◎社会の問題に対し何か言うことによって食べているという構造自体を考えたい。

◎全員が、家族を持って子どもを持って車を買って、とはならない。結婚している家族を社会の基本にすることに無理がある。

◎昔、寿町を歩いてショックだった。いま、個人的苦勞も経て釜ヶ崎を見たら感じ方が違う。離婚してシングルなので、そういうことを感じながらこのまちを見るときごく距離が近い。自分が変わったなというのを感じながら歩いた。うまく感想を言えない。

◎よくわからんけど惹かれるまちやな、と思いつつながらココロムに来ていた。今日このまちの歴史を聞いて、自分の父さんも1960年代に鹿児島から出て来た。亡くなったお父さんみたいな人がいっぱいいるまち。惹かれるのはそういうことやったのかな、と思った。

◎釜ヶ崎で女性が活動する時に、どうしてもあるジェンダーの問題。おじさんたちは「ホームレスしたことないやろ」「日雇いしたことないやろ」と言うことで、最終的にすべてを受け入れなさいと言う。それは無理や

ん。それから、釜ヶ崎でのエピソードのひとつひとつ。外でしゃべったりするのだけど、しゃべってるって時点でそれを消費しているって嫌な気持ちになる。でもそれを言語化して整理しないとしんどいことがたまっていって自分がつぶれてしまう。ぐるぐる循環しながらやってる。

◎（ココロムに来て、おじさんに手を触られた時、誘われた時などに）「そういうことをしたくないのです」とちゃんと毅然と表すことが大事。「(お店には)来て欲しいけど手は握られたくない」とか言う。

◎（デートDVの授業によって学生は変わるのかという質問に）一言で簡単に変わらないかもしれないけど、言葉として知っておくだけで、困った時に相談できたり、当然と思ってたことがちょっと揺らいだりする。小中学校の授業なんかでも、大きな資本主義の社会に生きているけど、違う生き方もできるということを知る機会があればと思う。

◎給料が安すぎると、何も考えられなくなっていく。こういう(今日話されたような)声が届くべき人にほど、届かないということ、すごく思う。

4月

しんどいと共に生きる

一 しんどい状況にある人と一緒にいる時どうする？

◎精神病院に入院していた時に、回復したという依存症の人が来てくれた。会って、その人みたいに笑えるようになりたいと思った。回復のきっかけはアドバイスではなくグッドニュースを運んでくれたことだった。

◎大事にしている言葉。「家具のようにそばにいること」。

◎建築の現場や飯場で、菓物の話がずいぶん出る。

◎しんどい時、誰かと比べてるってことがすごくある。しんどい人と話しているうちにしんどさがうつつてくることもある。その時に自分のしんどさにも気づいていく。

◎しんどいってどういうことなのか説明できずに、「しんどい」の言葉ですませてしまう。これまで心の動きを観察してこなかった、と気づいた。

◎自分がいかにしんどいかを何回も話してくる人がいる。そういう人の話をどう聞けばいいのか。

◎しんどい時に人に相談することができない。しんどい時にはこういう場所にも出て来られない。その前に何かできればと思うけど、できない。

◎こういうしんどい人に会ったらこういう対処を、と言われて違和感を持った。

◎ひとつのコミュニティだけで自分を認識されてしまうのがしんどい。複数のアイデンティティをもつことは、自分を楽にする。その時に表現活動があるっていうのは救いになる。

5月

空を見上げて生きる — 宇宙とケア!

◎子どもたちに星の話をする時に、「親に怒られた時、その原因って知ってるか?」と聞いて、「46億年前に地球ができたからだ。その後はなるようになった、そう思って諦める。親に怒るなら空に怒れ。何で俺を産んだ、ではなく、何で地球できた、って」と言う。(笑い)

◎自分の過去も空にある。外歩いている時のその姿って、宇宙から見えている。はじめて(釜ヶ崎の)三角公園で望遠鏡出してた3年前。その光景が宇宙の方へひゅーっと行って、いまは3光年のあたりに飛んで行ってる。おっちゃんたちが頑張ってた時代は、いまは織り姫くらい。◎自分が何かで苦しんでいるっていうのは、自分の枠組みの中で悩んでいるんだけど、それに変わるものを提示ってなかなかできない。宇宙っていうと、これくらいでかい枠組みはない。

■死刑が確定していて、独房から部屋が変わり、これまで見えた月が見えなくなってしまったという知人がいる。彼に宇宙の話を手紙に書くなら何と書けばよいか。

■(少し沈黙) その人にもいろんな思い出があって、思い出したくないものもひっくるめていま何光年くらいのところまで、何座の何まで行けると。

■人間が死刑にして閉じ込めても、そういう過去をこの宇宙から消すことはできないんだと。

■ただその人がいたってということ。書類の中にいろいろ残るけど、それ以上にこの宇宙にいたってというほうによほど大きな意味があって。加害者被害者ともに、みんな同じ宇宙の一部なんですよ。

6月

関わりあいながら生きる

一 聞くことと話すこと、その練習

◎聴くことの難しさ。沈黙をおそれない。話を横になって聴く、歩きながら聴く、なにか手を動かしながら聴くなどしてみる。真正面に聴かないことも大切。

◎聴いていて辛くなるのは、聴いているからで、自分をほめてあげる。内心聴くのを嫌だと思っている自分を認めてあげる。

◎人の話を聴く仕事をしていると、自分のなかで分類したり、わかったような気になったりして、アカみたいなものがついてくる。自分の調子が悪い時は聴かない。聴きながら、自分の中の声を聴くことが大切。

■精神的に不安定な友人から夜中に電話がかかってきて、何時間も話を聞くことがある。しんどいと思いつつ、「この電話切ったら大変なことになるのでは」と不安で切れないことが多い。

■聴く時間を区切る。あるいは次に聴くことのできる時間を指定して聴く。◎話がわからない人の話を聴く時には、主語が使えていないことが多いので、主語をつけてもらう。時系列に整理してあげる。

◎トラウマになっていることについて話してくれた時には、「揺り戻しがあつたらいつでも連絡してね」と言っている。

◎話すことは頭の中のことを捨てること。相手の耳はゴミ箱、ということもある。

7月

誰かと一緒に生きる

一 仕事のこと、介護のこと

◎眠るのと同じように無防備に一人でいる時間はとても大切。でも、自分のことを語る時には必ず他の登場者がいる。だから「人と一緒に生きる」ということを抜いて私はない。

◎誰とも口をききたくない時にはそれまで口きいた時間を自分で整理しているのかも。ひきこもりを病気ととらえるか社会的な抵抗と捉えるのか。そこまで考えてるということに意味があると思う。人生の大事な部分を「病気」という言葉で捉えすぎている。

◎人は信じちゃだめ。人は赦すもの。だって自分も信じられたら困る。(笑い)赦してって言えるのは他者に対するものすごい信頼の現れ。

◎家族の場合は治療的な関係は難しい。誰かに任せ方がいい。家族は、それまでの歴史や相手にとまらぬ自分の歴史も一緒に思い出す。あかの他人だからこそやれることがいっぱいある。

◎プロじゃないところの関係を大事にしたい。家族でもなく、親友でもなく。よけいなことも言うし、傷つけたりもするけど。

■心の病気を持っていて体調が悪くなると香水のにおいが強くなる人と働いている。席が近いので、私もどんどんつらくなる。それについて本人に言って良いものか、慎重になってしまう。

■できるだけ明るく言うようにしている。そうすると相手が理由を言い返してくれたりすることもある。言わないと逆にどんどん一緒にいることがしんどくなる。

■言ってくれないと、香水だけが嫌なのか、私をすべて嫌なのか、迷うよ。◎他者と関わる中で傷ついた時に、これからはつながりが…とかかって聞くとよけいにしんどくなる。

◎介護の理想はこまめ。そばに立っているだけ。

8月

迷い考え選りながら生きる

一 人生の岐路に立った時に

◎僕にとって選択は誰かのひと言。説得とかじゃなくてふつと言うような。一番ぐらついている時には吹いてきた風に乗る。

◎「やけばち」というのを上手に使いたいと思っている。やけは自棄、自分を棄てる。空っぽの自分の中にいろんな人の声をつめこんでいく。そこに生きるヒントがあるんじゃないか。

◎考えや思いを言葉にすることの得意さ、得意でな。こういう場で話の得意な人ばかりだとテンションの高い場になる。静けさを保ったままですすにはどうすればいいか。

◎たとえ工夫をしたところで、その場(見知らぬ人同士が関係をつくっていくような場)に来られない人がいる。その人のことをどう思うか。私たちは目に見えない人との関係に生かされている。「ただ言葉がやかましい場」にしないで、「どこか広さのようなものがある場」にするには、そこにいない人のことを思い浮かべながら話し、聞くことが大事。

◎(転機は)さみしさを感じた時にしかありえないんじゃないか。自分の



中にあるものだけでガンガンやれると思っている時には、自分と異なる人、自分を蔑む人、攻撃してくれる人と、会ってよかったとは思えない。つらい時に「そんなんでええんか?」っていうのが天地を変えるような言葉に思えてくる。

◎東京から遠く離れた所で伝えなきゃいけないことがあって、でもいまはその受け皿がない。文字の世界・情報の世界・書物の世界から遠い世界、そちらの声の方に寄り添って仕事をしたいと思った。

9月

### 依存と共に生きる

◎依存から離れる時の喪失感は何のすごい。プログラムより、まず仲間の中にいられる居場所をつくること。悪い依存からいい依存への転換が大切。

◎ダルクの支援につながるまでは、薬を使っていることを言えなかった。ここに来たら今まで話せなかったことが話せるし、笑ってくれた。みんな一緒だから恥ずかしくない。これまでは「二度と来るな」とばかり言われていたけど、「またおいで」と言ってくれた。

◎組織内でミーティングをしなくなった。話をするのでいるんならパワーゲームがはじまってしまうから。

■支援の仕事をしていて、影響力を与えてしまうことについて考える。影響力を与えることで自分がいい気分になっているのではないかと、と思う。

■影響力というのは片方が与えるものではなく、お互いに与え合っているものということ。

■一対一の影響力ではなくて、多様な関わりの中での影響力ならよいのではないかと。多様な、複数の声があるということ。

◎介護の現場では、「何を食いたい?」と聞いても選択肢がわからない場合がある。その時にはスーパーと一緒にいって、食材から一緒に選ぶ。

◎医療の仕事に就いたが、白衣というものを着て、プロになりたいよりも、学生で素人として現場に入っていた頃の方が、相手に言葉が響いたように感じる。

◎支援の現場で働く人のなかで、当事者とそうでない人のバランス、対等さ。これまでは当事者を引き立てるのが自分の役割と思っていたけど、最近では違ふなと感じている。支援者が自分にスポットライトをあてることも時には必要。

まちでつながる えんがわおしゃべり相談会 実施データ

◎2月26日(日)参加者：34人 ◎3月25日(日)参加者：8人 ◎4月17日(火)参加者：15人 ◎5月14日(月)参加者：15人

◎6月30日(土)参加者：25人 ◎7月25日(水)参加者：8人 ◎8月23日(木)参加者：20人 ◎9月17日(月・祝)参加者：15人

◎10月12日(金)参加者：18人

10月

### 問いながら生きる

#### — 境界線／エイズのこと、ジェンダーのこと

◎HIVは誰でも感染する病気なのに、日本では9割がゲイの人。感染予防をしないというのは、もともとゲイの人が社会的にしんどい状況にあるからなのではないか。5年、10年先のこと、そのための自分の健康を考えられない状況にある。

◎薬物依存者もゲイも、歴史の中では無視されてきた。差別されるようになっただけ進歩。これからは希望がある。

◎地域でのアートの活動を支援するのは、これまでの権威を切り崩したいという思いがあるから。アーティストの表現は暴力的だと言われることもあるが、地域には、もともと大きな暴力的な関係性があるように感じている。

◎自分がどう人間なのか、カミングアウトするかどうかは、それをカミングアウトしたほうが、自分の言いたいことが伝わるかどうかで判断している。

◎自分らしさ、って本当に必要なのか。「自分が生きやすいかたち」のことを「本当の自分」と言っているだけなのではないか。

■自分が生きやすいことが、誰かの生きにくいことにつながるのではないかと。

■何かを表明する時には、誰かを必ず傷つける。けれど、傷ついた人も「傷ついた」と言える状況にあればよいのでは。みんなが、思っていることを声にできるように。

◎ひとりひとりが、「世の中的には」ではなく「私は」と話しはじめることが大事なのでは。

## けんこう相談会



2009年度の後半からココルームはえんがわ健康相談会に取り組み始めた。毎月1回、健康相談会の幟をたてて、カマン!メディアセンター前に長机を置き、飴玉やお茶を置いて、看護師さんが血圧を測る。無料。1時間余りの相談会に人々は腕をさしだし、おしゃべりしていく。

このスタイルを思いついたのは、「ココルームに協力したいけど、何かできることあるかしら」と看護師の梅田さんに言われたことに端を発する。鶴見橋商店街にあった梅田さんが勤める訪問看護ステーションを訪ね、話し合ううちに動物園前商店街でひろく健康相談会のイメージが立ち上がった。梅田さんは野宿者向けの健康相談に携わっている看護師さんでもあり、話はトントンと進んだ。ただ、わたしたちは事業費の確保もできておらず、梅田さんたちはニーズ調査ということで、訪問看護ステーションの事業として関わってくれることになった。ココルームは場所の用意と広報を行なうという協働のスタイルではじめた。

わたしたちは、このまちでさまざまな問題や困難をかかえた人たち、おもに中高年男性に出会うが、なんの専門性も持ち合わせていない。ともかく出会い、表現しあうことを大切に、つながりが生まれたら、少しは生きやすくなるんじゃないかと思い、そのきっかけをつくる。絵を描いたり、俳句をつくったり、おしゃべりしたりする。喧嘩もする。そんな取り組みのなかで、医療の専

門家が月に1回この場を共有してくれたら、きっと多くの人が喜んでくれるのではないかと思ったのだ。

このまちのおじさんたちは、実際の年齢よりもかなり老けてみえる。彼らの平均寿命は全国最下位73.1歳(2005年国勢調査)。自分の健康には無頓着そうだが、こころの奥にからだに関する不安をもっていると思う。実際、看護師さんたちと話し、血圧を測ることをきっかけにすぐに病院に行く人もいた。人との関係につながっていく人もふえた。そして当たり前といえば当たり前なのだが、医療従事者の専門性のなかに表現が組み合わさっており、その巧みな表現のうえに、場が励まされたり、和んでいたり、わたしたちのほうこそ回復の機会をもらっていた。

ちょうど4年前のある日、常連客の知的障がいのある1さんが口から血を流してやってきた。どうしたのかと聞くと、口のなかがおかしいと言う。そこにいたスタッフやお客さんたちが心配して聞くと、どうやら歯磨きをしていないということがわかってきた。すると、誰が用意してくれたのか、翌日には歯ブラシと歯磨き粉がココルームとカマン!の水場に用意され、歯磨きの方法が1さんに伝授された。1さんがココルームに来ると、みんなに「歯、磨いた?」と聞かれ、歯磨きが挨拶のことばとなった。

このまちの歯科医で、野宿の方に歯科医として相談活動もしている渡邊先生を訪ね、ココルームで開いている健康相談会のときにおくちの相談会を開いてもらえないか相談をした。歯磨きの指導だけでなく歯科衛生士だけでもできるが、おくちの相談となると歯科医がいないと実施できないことがわかった。金銭的な問題を解決しないことには専門家による口腔ケアは実現しないことがわかり、助成金申請をはじめた。

2010年にラッシュジャパンの支援が決定し、ふたつの健康相談会がスタートした。内科と歯科のコンビは頼もしく、商店街のなかでも定着してきた。そして2011年にはファイザーの助成を受けることができ、継続することができた。受益者は野宿者や生活保護受給者、障がいをもつ人がほとんどで金銭的負担は望まず、また当法人が制度活用もできず助成に頼らざるをえないという問題ははまだ解決していない。



## 健康相談会記録メモより

人口密度が日本一の萩之茶屋2丁目に、わたしたちが2011年から管理の仕事になうマンションがある。1階に交流スペース「こころぎ」をつくり、ささやかに活動していた。かつて関わった患者がこのマンションに住んでいるという梅田さんから、こころぎで相談会をやってみたいという提案があがった。そこで今年の5月から定期的に健康相談会を開催することになった。萩之茶屋2丁目は釜ヶ崎の中心地に近く、かつてはドヤ、現在は生活保護受給者が暮らす福祉マンションが密集している。こころぎにはマンションの住人だけでなく、近所の方々が来てくれる。やがて、梅田さんたちと協力して、こころぎの運用を活性化していくことになる。

さて、次頁の記録メモをふりかえると、この健康相談会が定期的に開催されることによって健康相談という糸口から医療に

つながったり、心配事を話したり、何気ないおしゃべりにホッとできたり、励まされたり、自分のことを気にかけてくれる人がいるということの嬉しさであったり、さまざまな人とのつながりを生み出していることがわかる。血圧を測ってもらいながら泣いているおじさんがいた。人と喋ったのは2ヶ月ぶりだと言っていた。Iさんもおくちのなかを診てもらい、歯磨き指導をうけた。入れ歯の扱い方がわからないおじいさんに、何度も丁寧に説明してくれる衛生士さん。そのやりとりのなかで、怒りっぽいおじいさんが落ちついていくのを傍らで見て、本当の専門家というのは懐が深いのだとつくづく思う。

今後の課題は、事業を行なうお金の確保についてだ。医療福祉側からみれば、ニーズ把握や実態調査、予防が行なえと考えることもできるはずだ。そういった方面からも考えてみたい。

## まちでつながる けんこう相談会 実施データ

◎2月17日：健14人、口5人 ◎3月21日：健17人、口5人 ◎4月18日：健10人、口3人  
◎5月2日@こころぎ：健5人、口2人 ◎5月16日：健10人、口3人 ◎6月20日：健24人、口2人  
◎7月4日@こころぎ：健10人、口2人 ◎7月18日：健18人、口0人 ◎8月1日：健14人、口1人  
◎9月5日@こころぎ：健11人、口2人 ◎9月19日：健14人、5人 ◎10月17日：健19人、口4人  
\* 健：健康相談会 口：おくちの相談会



田さんは「いま測っておけばお酒を飲んだ時の血圧がどうなるかわかるから」と声をかける。これまでお酒を飲んでいるという理由で診断を受けられなかった方に何人も出会っている梅田さんだからこそ一言だな、と感じられた。このまちではアルコールの問題が大きく、具体的にどうしていくか、がやっぱり大事。(6月20日)

## 何事も遅すぎることはない、と明るい声で、チャンスに変えてくれる

Nさんは歯の抜けているところに義歯を入れることに。このままではおかゆしか食べられない、と言われていた。歯磨きの指導も丁寧にしてください、できていないところに関しては、決して責めることなく「これがチャンス!」と衛生士さんが明るく声をかけてくださっていた。専門家が力強く話してくれることばに励まされるのはこんなとき。(7月4日@こころぎ)

## 窓口があると、話がしやすい

血圧を測ったりはしないけれどとにかく話を聞いてほしい、という人もいる。健康相談という窓口があることで、話しやすくなるようだ。看護士さんは、最後に「ここ(カマメ)は、いつ来てもいいところだよ」と声をかけて、次につながるようにならされている。(7月18日)

## 血圧が高い方が二人いた

Tクリニックに通院している方と、はじめての方。もうすこし様子を見ることに。先月来て、今月も来ると言っていた一郎さん。先月は肝臓が痛いと言っていたが来ていないのが心配だと看護士さんから報告があった。一郎さんはときどきコロシアムに来るお客さんなので、体調を聞いてみて、具合が悪そうであれば医療センターに行くように促すことをスタッフと共有しておく。(9月19日)

## 定期的な開催だからこそ、励みになる

今日はおくちの相談と健康相談との連携がうまくいって、入りやすい雰囲気があり、参加者が多かった。また、女性の相談者も多く、前回来てよかったからと、再び来てくれた方もいた。歯磨き指導を受けた参加者からは、前回指導してもらったことを1ヶ月気にして生活してみた、との声も聞かれた。(9月19日)

## 月1回の健康相談会。つづけることで、おしゃべりを楽しみにしてくれるように

健康相談会も3年目に入り、毎月おこなっていることへの安心感からか、寒さで体調が気になる人が多かったのか、はじめて相談に足を止める人が多かった。「血圧が高いから」と気にして、血圧を測られるのを嫌がり計らせてくれない人もいたが、そんな方も看護士の梅田さんとの会話のやりとりを楽しんでいた。「来月まで生きてないと思う」と言うおじいさんに、「生きてたら顔見せてね」と返す梅田さんの姿が印象的だった。(2月17日)

## 緊急を要する場合は、その場で病院へ電話する

看護士さんの人数が多かったこともあり、また、参加者のひとりが道行く人によびかけてくれたこともあり、いつもよりにぎやかな印象。このまちの83%が男性なので、立ち止まるのはほとんどが男性だが、今回は17名中7名が女性だった。血圧が高い方には、病院へ行く日時を決め、その場で病院に電話し、確実に医療につなげるようにならされていた。(3月21日)

## 歯医者さんは敷居が高いから、こんな機会に相談を

歯の相談についても、今回ははじめて訪れる方ばかりだった。やはり治療が途中になったままで気になっているという人が多く、そんな方へは、地図を渡し、時間を教え、歯医者さんへつながるようにならされていた。病院へ行くのはおっくうだけれど、ずっと気にかかっている、という人が多いことがわかる。(3月21日)

## 釜ヶ崎のマンション1階での健康相談会をはじめ。長いつきあいになりそうな予感

はじめてのこころぎ(萩之茶屋2丁目のマンションの1階)での健康相談会。看護士さん、歯科衛生士さんの明るい声、女性が多いせいか、部屋があたたかな感じ。住人の方に事前にもっと声かけをして告知しておけばよかった。(5月2日@こころぎ)

## 健康相談会を楽しみにしてくれる人もふえて

カマンメディアセンター前を通るおじいさんから、次回の健康相談会の日程を聞かれることもあり、相談会もリピーターの方が増えているようだ。(5月21日)

## お酒を飲んでいても、血圧が測れる

相談会には、自分で「アルコール中毒だ」と言う方もいらっしゃる。「今日も飲んでるから血圧をはかっても意味がない」と投げやりな方に、梅



ことばにならない

上田假奈代

市営第2住宅の1F

とびらのむこうには元屋台通りの三得寮の塀に  
赤やピンク 白のかわいい花がリズムよく咲いている  
オリーブの木のような枝に風がそよいでいる

からだのことを話している

お互いに、今日のはじめて会った人からだのことを話している 聴いている

にやにやと聴いている

みぶりでぶりで喋っている

8分たち

インタビュー

交代する と にぎやかさのトーンが変わる

道を行く2人の男

ブチューと抱きつくと ヒラヒラと笑いながら みえなくなった

自転車が何台も通りすぎる

瀬戸内海から自転車にのってやってきた青年もいる

クマをおいかけてきた人もいる

からだが動くうちに自分の人生のしまい方を

考えている

2週間の入院が1年のように感じられ 一日一日を

一生けんめい生きている人もいて、

わたしは あの日から ときどき 音が

聴こえなくなったようなきがしている

インタビューが終わって 詩をつくっている

さっきまでのにぎやかな声は遠のき えんぴつが紙にあたる音とすこしの咳の音

ことばをさがす静かな呼吸の音が聴こえる

遠くで車が走る音がして、だれかが洗濯物をとりこんでいる

だれかのからだのことを詩にしながら

人がもつ だれもがもつ

たったひとつのからだのことが

やっと 存在するような 静けさ

たったひとつもつもの おサイフ、服、

こころ、じかん、いのち といった

現代の社会ならではのものから

ときに あるのかわからず 目にみえないものまで

たったひとつ もっていることを

市営第2住宅の1Fで 確認しながら

くわえタバコで歩いていく男たちの足音を聴く

たったひとつの からだで

たったひとつの こころで

たったひとつの 人生で

たったひとつの じかんと 重ねながら

\* 表現のワークショップ  
「ことばを楽しむ」の様子を詩に

## 表現のワークショップ

「多様」って言われるけど、ほんとの多様は、そんなになめらかじゃない。ざらざらした多様をまちは包み、表現のワークショップではひとりひとり多様をおずおずとそつと、あるいはどぴやつとさしだす。

### まちに出よう

今回の試みは、企画した植田がコロールームの拠点を出て、まちに出て活動してみようと考えたことに端を発している。ところが、釜ヶ崎では暴動抑止のためなのか、多くの人が集まれる場が極端に少ない。最初は会場探しに難航することになった。

三徳寮<sup>(1)</sup>との共催によって、会場は思いかけず「あいりんセンター」横の市営第2住宅1階の元店舗の1室（ここにゴブラザ）が提供された。思いかけず、というのは、寄せ場<sup>(2)</sup>釜ヶ崎を象徴する「あいりんセンター」のそばということだ。かつては早朝から手配の車が並んだ。今でも毎朝5時にシャッターが開き、トクソウ<sup>(3)</sup>の輪番の列ができ、夕方はシェルター<sup>(4)</sup>の整理券を待つ長い行列ができる。ときには炊き出しがあり、夜になればセンターのまわりで数十名が野宿している。ワークショップの会場の扉の横でも、ふとんを敷いて眠っている人がいることもあった。「ほんとに困っている人に、アートより先にすることがあるでしょう」とよく言われるし、考えてきた。まさにこの場所で表現のワークショップがどのように受けとめられるのか、やってみないと、まったくわからなかった。ただ、これまで10年ちかく、釜ヶ崎に関わりいろんな取り組みをしてきたなかで、表現の持つ可能性を感じてきた。だからこそ、まちに出ようとした。

### 多様な人々にであう

全9回を3回ずつ3人の講師によるワークショップにしたのは、表現のジャンルを変え、講師や参加者とのあいの楽しさ、新しいことにチャレンジするワクワク感をつくりたかったからだ。講師はそれぞれの持ち味で2時間の出会いを豊かに織りあげていく。

日頃は福祉の職務につく三徳寮の職員さんたちがとまどいながらも、この取り組みに並走してくださった。参加者は釜ヶ崎に暮らす男性たちだけではなく、支援側にいる人、遠方から若者や女性なども来てくれた。とりわけ、福祉の支援側にいる職員がこういった表現ワークショップに当事者といっしょに参加するということは珍しい。このケースではコロールームによく来てくれる男性が講師の佐久間さんと作品<sup>(5)</sup>をいっしょにつくったことがあり、この男性が通う作業所の職員やメンバーを誘って来てくれた。

### まちと表現

釜ヶ崎にはこれまでメディアによって、暴動や日雇い労働者のまち、こわいまちといった一括りのネガティブなイメージが付与されてきた。表現のワークショップを通して取り組みたいことが3つある。

ひとつは、このまちの人自身が表現をととして回復すること（エンパワメントされること）。人とつながること。

もうひとつは、そこに居合わせた人（地域外の人やあるいは支援側など）が何かに気づき、また回復すること。

最後のひとつは、このまちのネガティブなイメージを翻し、ひとりひとりの生を現すこと。

人は安心した場でないと表現などできない。そんな場づくりと関係性づくりをして、それからワークショップや日々の出会いや交流があって、また揺り戻しがあって、また出会いなおして……と、とても時間がかかる。地味でささやかな行為であるが、こうした取り組みのなかで織りなされた知恵や人間関係は、それぞれの生活に持ち帰られていると思う。もしかしら、これらの営みそのものが、まちで生きる人生、生き物としてのまち、そのものかもしれない。

じつは釜ヶ崎というまち、表現のポテンシャルが高いと思っている。寄せ場という厳しい状況を生きてきた人々、その問題に取り組んできた運動や施策、さまざまな活動が重なってきた釜ヶ崎。だからこそ、表現のもつフック（引っかけ）がこのまちに効き、人々のこころに響くのだと思う。わたしたちは少なくとも次の展開へとつながるヒントを得たと感じている。勇気をもって、もっと、まちへ出ていこう、と。

<sup>1</sup> 三徳寮 身体上または精神上何らかの障がいがある、独立して日常生活を送ることができない人が入所し、生活扶助を受ける救護施設。（生活保護法第38条 第2項）

<sup>2</sup> 寄せ場 日雇い労働の求人業者と求職者が多数集まる場所のこと。寄り場ともいう。釜ヶ崎は3大寄せ場のひとつ。

<sup>3</sup> トクソウ あいりん地域高齢日雇労働者特別清掃事業。55歳以上の釜ヶ崎の高齢日雇労働者を対象とした輪番登録制。1日5,700円の収入。

<sup>4</sup> シェルター 地域内にある緊急夜間避難所。2カ所あり、1000床ほどのベッドがある。夕方にあいりんセンターで整理券が配られる。朝5時には退出。

<sup>5</sup> 作品 「こころのたねとして」という手法を用いた作品。他者の人生を聴き取る。このとき、佐久間さんは釜ヶ崎に暮らす岡山さんと何度も散歩をしたりして、作品づくりに取り組んだ。詩は「OCAI2011 こころのたねとして山王・飛田・釜ヶ崎」に掲載されている。



2月16日(木) 3月8日(木) 4月12日(木) @にこにこプラザ

## 体を動かす

講師：佐久間 新 [ダンサー]

### まちにダンス! 世界のあちこちにダンス!

(佐久間 新)

ココルームのふたりのうえださんからダンスのワークショップをして欲しいという依頼があったので打ち合わせに出かけた。ゆうこさんが「釜ヶ崎ダンサーズ発足へ向けて…」[さくまダンス、ウィズアウトさくま…、みたいな]とつぶやいた。このところ釜ヶ崎やココルームとなんだか妙に縁がある。昨年は、大阪市立大学で SHINGO ★西成さんや釜ヶ崎のおっちゃんやダンス、飛田会館で釜ヶ崎の岡山さんとペアになって詩の創作と朗読、こどもの里で劇団トルの「あんこかて人間や!」という芝居と立て続けに釜ヶ崎とつきあった。その中で、僕は釜ヶ崎のおっちゃんから表現を盗もうとしていたのかもしれない。なのに今回は教える側、しかもウィズアウトってどういうこと? 頭の片隅でこのコトバがチカチカと点滅した。

表現のワークショップは3回シリーズで、僕が一番バッテリーだった。釜ヶ崎が身近に感じられるようになったとはいえ、今回の主な参加者とは初対面だったし、参加者にとっても僕がするようなダンスは慣れていないだろうと思ったので、最初はなるべくじっくりとはじめようと思った。ただたたずんでいるだけでもダンスになりうるんですよ、座ってたって、寝てたってダンスになりますよ、指だけでも、足だけでも、顔だけでも、目だけでもダンスになりますよ、っていうのがこの日のテーマ。

テーマと書いたけれど、あまり縛られすぎではいけない。即興ダンスのワークショップは即興的で、いきあたりばったりであつたほうがいいし、その時間がひとつのダンスであるような感じでやりたいと思っている。人や場所とはじめて出会う瞬間は、刺激に満ちている。ぎこちなさ、居心地の悪さ、空気のカタイ感じ、ヒリヒリする感じを味わう。そして、それをすこしずつ解きほぐしていく。さすったり、さすられたり、そおと揺らしてみたり、時には激しく動かしてみたりしながら。人と人との関係や場所の空気が変わっていく。かかわることからダンスが生まれ、ダンスすることからかかわりが生まれる。

2回目のワークショップの時に、表を通りかかったトラックが、ちょうど地面に降り立った鳩を轢いた。ぶずっという音とともに即死だった。頭の横に穴がぱっくりと空いていた。ちょうどからだど気持ちが開きはじめていた時だったので、命のあけなさを、それが宿るからだ単なる袋なんだっていう感触が、こころに突き刺さった。みんなで輪になって、ゆっくりと呼吸をしながら手をからだの真ん中に添わせてみた。次第に落ち着いてくると、合わせた手の間になにかがうまれてきた。岡山さんが「飲もう」と声を上げた。両手の掌に溜まった見えない水を、みんなで飲んだ。岡山さんは、この日、職場の人を何人も誘って参加してくれていたのだ。ワークショップの後半で、釜ヶ崎周辺へ散歩に出た。からだで街を感じながらの散歩、いつもの風景が違って見えるかな? 散歩の最後に行き着いたゴミ捨て場で、岡山さんが蛍光灯の笠をかぶると、溜まっていたホコリがふわっと舞った。いい瞬間だった。

3回目のワークショップでは、自分のまわり、特に音とどうかかわるか、ということ、縛られてはいけない隠しテーマにしてみた。最初に、部屋で聞こえる音と踊ってみようと思ったけれど、車や工場の音が大きくてうましくない。どんな音だってダンスがうまれえるし、いきあたりばったりでいきたいと思ってるんだけど、それでも自分の我のようなものが出てしまう。少し方向性を変えて、部屋の光を感じてみる。「電気代がもったいない」と岡山さんが声をかける。電気を消して、外から差し込む光を感じる、それにひかれて外へ出てみる、風を浴びる、空から鳥の音が聞こえてくる。すると、工場の音が、車の音が違って聞こえはじめる。音を立てている人の姿が見えてくるからだろう。この日は、最後はあいりんセンター中で、みんな思い思いにたたずんだり、踊ったりしてみた。

さて、ウィズアウトってなんだろう? 僕が行かなくても、いろんなところで、いろんな人がダンスをはじめられたらいいだろう、ってふたりのうえださんが考えてくれたんだろう。うれしいことだ。では、そのために何をすればいいのだろうかという答えは出ない。僕自身はどこかで、僕自身も踊りたいと思っている。踊りは、仕事やゲームじゃないので、マニュアルを作ることは難しい。マニュアルになった瞬間に、こころがおどらなくなっちゃう。それでもかかわり続けることで、世界のあちこちに、こんなところにダンスが隠れているよとみんなで発見し、こころからだをおどらせて、そして、さらに誰かを誘って一緒にダンスしようってことになればとてもいいと思う。



### 事務局レポート

## 「体を動かす」記録をとおして

釜ヶ崎の冬は厳しい。野宿生活は凍死を招く。寒さに体力が奪われる。路上の毛布ががさつと動くたびにその寒さをおもう。3畳の部屋からなかなか出る気にもなれない単身生活。そんな冬のまったただな2月から表現のワークショップははじまった。

ジャワ舞踏のダンサーの佐久間さんは釜ヶ崎のおっちゃんたちの身体性に魅力を感じていて、ココルームの前でみんなと風のように踊ったり、釜ヶ崎を題材としたお芝居に出演した経験の持ち主。ダンサーのまなざしは人の身体性や空間の扱いを瞬時に変えるところにある。あいりんセンターそばでのワークショップに緊張がないわけでもない。だからこそダンスに期待したのは、空間と身体とイメージの衝動的パッションが自身を、あるいは関係をほぐしたりできればいいなと思っていた。



1回目は思ったよりも参加者が多く、会場が狭く感じる。ダンスが日常の動きのなかにあることが示されるが、途中退屈そうにしていた男性も後半20分ほどは無言のファシリテートにいっしょに身体を動かしていた。みんなで動くとき浮遊感が生まれる。雲の上に乗って飛んで行って、落ちてまた雲に乗ったような感じ。佐久間さんから3回目にはどこか外で踊りたい、ということが提示される。

2回目は佐久間さんのインドネシアの師匠の不思議な雨乞いの話からはじまった。みんなでリラックスして手をあげて呼吸していると、扉の前の道路で一羽の鳩がトラックにひかれ即死する。みんながショックを受けて外に出て行く。鳩を囲み合掌する。鳩の死骸を袋に入れてあとで埋めることにし、ワークショップを再開する。「いま、やろうとしていたことは鳩の死につながっています。やってみましょう」それぞれのてのひらに何かを流しこみ、渡していく。真ん中にあつまり「流しましょうか」と佐久間さんが言うと、参加者の岡山さんが「飲もうや」と言った。みんなで飲む仕草をして「あーおいしかった」。それはまるで鳩の死を受け入れていく儀式のようでもあった。休憩のあと、みんなで外に散歩に出かけた。それぞれが日常の道をちがう視点で歩いた。

3回目は春になっていた。4月。部屋の電気を消して聴こえてくる音を聴く。地面を掘る大きな音、郵便屋さんのバイクの音。外にでると、両手をひろげ風をうけとめる。シャツのボタンをはずし、スカーフを風になびかせる。手をまわしている男性が通りすがりの友人に「運動やで」と誘うが、相手の人は去って行く。佐久間さんが風景のなかにある線をなぞりはじめる。みんなも壁や電柱などの輪郭を指で空中になぞりはじめ、身体のなかにある種々の感覚が生じてくる。小さな声やハミングをしながら歩き出す。岡山さんと佐久間さんがふたりで道の真ん中で踊りはじめる。「よしよ、よしよ」「はいはいはい!」のかけ声。通りすがりの人がひとりいっしょに参加する。遠巻きに見る人、無関心に通りすぎる人もいる。

やがて静かになり、ひそやかにあいりんセンターのなかに入って行く。まばらに人がいて、消毒液や小便の匂いが鼻につく。佐久間さんとみんなは歩きながら、でもダンスの身体感覚で歩いている。やがて、そこへトクソウの人たちがやってくる。床に水をまく人、デッキブラシでこする人。みんなは水でない噴水に近づき、佐久間さんははっきりと踊り始める。トクソウの掃除する音、デッキブラシで床をこする音が近づくと、佐久間さんはまっすぐにそちらをみつめる。20人余りがデッキブラシをこすりながら進んでいる様子はダンスに見える。通り過ぎて行く。「戻りましょうか」ワークショップのはじまる前とは違う身体感覚。風の音、雀の鳴き声、耳に入ってくる音が鮮明だ。会場にもどり、もうひと踊り。参加者のMさんが「何でも勇気だせば大丈夫なもんだ。みんなを喜ばせると勇気が出る」と結ぶ。



5月10日(木) 6月21日(木) 7月12日(木) @にこにこプラザ

## 出会を楽しむ

講師：岩橋由莉 [表現教育実践家]

### 人と出会って、経験すること

(岩橋由莉)

#### 1. 3回のワークショップの内容をふりかえっていただけますか。

「出会を楽しむ」というタイトルをつけたのは、私自身もこの場所やここに来てくれた人たちの出会いをしっかり楽しむ時間にしたいなと思ったからです。西成の場所、来ている人たちを感じたいと思って1回目は自己紹介の中に好きな映画、テレビについてお話してもらいました。参加者のみなさんの中に記憶として残っている映像や物語はとも興味深くて、その方の世界を少しのぞけたような気持ちになりました。そしてメインは「聴く」という活動です。参加者の話を聴くのはもちろんの事、その背後で聞こえてくる西成の場所の音も含めて、「聴く」。実は私自身、聴くことだけに特化した活動は全く初めての試みだったので、ドキドキの1回目でした。やってみると、「聴く」中で起こる「沈黙」にも味わいがあり、語り手特有の「間」も生まれて、まるでひとつのシーンを見ているような気持ちになりました。皆勤賞だったシャカさんが、聴くことって大事ですね、と深く味わってくれたのが印象的です。

2回目は私が大遅刻をしてしまい、最初の1時間をスタッフのゆうこさんをお願いするという事で、「聴く」ことの続きの活動をやってもらい、後半からは身体で即興的に表現することをやってみました。大雨の日で、ゆうこさんが「雨の日に思い出すこと」を題材に進行してくれて、私が遅れて入った時には、しっとりした雰囲気が流れていました。その感じで私自身も小さい頃の雨の思い出話がぼろっと出てきたりして、不思議で素敵な時間が流れていました。休憩後に加わったMさんとまっちゃんという名コンビが、身体で表現する活動「表す」の流れを決めていきました。その流れに乗っかる形で、思いついたことをすぐ身体で表すという体験を進めました。その日のメンバーが躊躇を感じない人たちだったらしく、どんどんと流れていく楽しい活動となりました。

最後の3回目のテーマは、「共有する」です。見えないものや思い出を身体で表現しながら共有していくことで、どんなことが起きるのかやってみてみたいと思いました。わからなくても、間違っても、相手の動きから想像していくことの面白さを感じてもらえれば良いなと。最後には、それぞれの思い出の場面のシーンを再現してみました。どれも印象的な場面で、思わず進行している私がぐっとくるところが多々ありました。どの回も相手が居なければ成立せず、自分以外の考え方に触れること

によって起こる出来事を経験してもらいました。来る動機、言葉の理解度、年齢など様々でしたが、それが違うからこそ楽しめる場を創りたい、毎回そう思っていました。

#### 2. 今回の釜ヶ崎でワークショップをするなかで、特に気がつけたことはありますか。

どんな人が参加してくれるのかがわからなかったの、常に臨機応変に考えていました。来てくれている人々をよく見て感じていようとそれだけを考えていました。

#### 3. 印象的だった場面や参加者とのやりとりはありますか。

それぞれの場面で印象的だったことはたくさんあります。でも、あえて今あげられるのは二つです。

3回目の活動で一人の人が想像したものを、皆が何かを考えながらそのものを受け取り、渡していくという活動をやった時の事です。相手の想像したものはわからなくて当然だと思っていました。ですから、一度試みて、うまく伝わらなかったねと、次へいこうとすると、参加者のシャカさんが、「もう一度(答えを聴かずに)回してみたい」と提案してくれたのです。すぐにもう一度よく観察しながらみんなでその見えないものを持ち、相手に渡していくという行為を行ったところ、何を運ぼうとしていたのかが、おぼろげながら全員に感じられる瞬間があっけびっくりしました。今日会ったばかりの人が想像した何やらわからないものを、わかりたい!と出して発信してくれたその一言に心が強く動きました。

いつも受けこたえが柔らかく穏やかなMさん。2回目の最後の活動で乱暴な神様たちが白ウサギをいじめるシーンをやりました。その時に、他のメンバーは互いに触れて小突きあうのを楽しんでいましたが、Mさんだけはそれに参加するのをかたくなに嫌がりました。「これはけんかが起こる」「これは危ない」と本当に嫌そうでした。こうした場面はMさんの中の嫌な想いを連想させるようで「こんなことをやってはいけない」とそのあと何度も言われました。自分の全財産をお腹に入れて移動するMさん。「人は許さないといいけない」と何度もいわれるMさんが初めて見せた怯えでした。

### 事務局レポート

## 「出会を楽しむ」記録をとおして

初夏から夏にかけて月に1回ずつ開催した「出会を楽しむ」。会場の扉に貼られた手書きの墨字の看板を見て、「出会い系か?」とつぶやく声が聴こえる。

初回は「聴く」ということをテーマに。

由莉さん「私たちは言葉だけでは聞いていない。身振り、外の音のこと。もしかしたら興味の無いことかもしれないけど、全部ひっくるめて聞く。全然しゃべりたくないってなるかもしれないけど、沈黙もいいと思う。いいですか…? 今日はそのいう出会う方をしてみようかと」

参加者のシャカさんは、釜ヶ崎で暮らす。「断酒することになって、治療のプログラムにミーティングと言って体験談を好きにしゃべるといがある。聞きっぱなし。つっこむのではなく…というのを3年間、毎週2回やっていた。酒飲んでる時、相手の話は聞いていない。でも自分より人の話聞いてたほうがおもしろいことがわかった。受け身の人生もなかなかオツです。人の声、おふくろの声、女房の声、懐かしい」



2回目は由莉さんが1時間遅れるというハプニングがあり、みんなで協力あってワークショップを行なう。雨の思い出をめぐりながら語る。由莉さんが到着してからはそれぞれが思い出のシーンを語り、じっさいにみんなで無言劇をする。釜ヶ崎在住のMさんが演出をはじめ「無言劇やから喋ったらあかん」と何度も言っているが、Mさんは喋りつづけている。

3回目はみんなで見えないものをあつかう。空気をかきませたり。後半はみんなの思い出を順に芝居にする。シャカさんが4歳のときに写真技師の奥さんに恋した話が語られる。お別れの日、その奥さんが来て、写真撮影をするはずが、のりちゃん(シャカさんの愛称)は恥ずかしがって押入れから出ることができなかったという。その話を芝居にする。

のりちゃん役の米田さんは部屋の隅で後ろを向いて、押入れの戸を開

けたり閉めたりしている。

お母さん役のMさん：「のりちゃん、のりちゃん、写真を撮るわよー、恥ずかしがらずにできなさいーい! 仕方ないわね、お母さんがつれてこよう」と言って(シャカさんの思い出の事実とは異なるが)米田さんの手をつかんで引っ張っていく。

その様子を見て、シャカさんは「ああわしもこうしてほしかった!」と思わず口にする。

由莉さんは展開に驚きながら「シャカさん、こうしてほしかったんですね」

奥さん役の由莉さん：「せっかくだから、のりちゃんとお別れの写真とつてもいいですか。カシャ」

こうして芝居が終わり、感想をきくと米田さんは「いい思い出を体験させてもらいました」。シャカさんは「見ていて、俺もそうしてほしかった、とあらためて思いました」。過去の思い出が蘇ってきたのか、泣きそうになっている。Mさんの予期せぬアドリブが思いがけない展開に。

ワークショップのあと、スタッフが考察した。

「イベントのときもそうでない時も、ココロームスタッフはみんなが安全に居られる場になっているか考慮して、知らず知らずのうちに気を張り続けるを得ないが、由莉さんのワークショップのあいだは、由莉さんにその場を預け、委ね、気持ちを軽くしてそのファシリテーションを学ぶことができる。聞くということ、沈黙も含め大切にしようということを意識する。由莉さんの相づちにも秘密があるのだろう。ただ話し、なんとなく聞くという感じとはまったく違う、ほどよい緊張感のある時間になったと感じた」

ふりかえりのときのシャカさんの発言「表現って人生が動くこと、行動とかもそう。表現って残すことかもしれない。今まで透明人間みたいな生き方してきたから、何か考えたい」

釜ヶ崎で暮らすMさんは、前に演劇の舞台にでたときのことを話し「自分でアイディアを出すということが大事ななやな」と言う。

記録係のOさんの感想「僕が語りたことと相手が見たいことは違っている。一方的に語るだけじゃ伝わらなくて、『聞いてもらう』ということが必要で。一方的に聞くだけじゃ、ちゃんと聞けなくて、『語ってもらう』ということが必要で。お互いの思いやりがうまくかみ合ったときに『語る』と『聞く』が通じ合うんだろう」



8月9日(木) 9月13日(木) 10月11日(木) @にこにこプラザ

## ことばを楽しむ

講師：上田假奈代〔詩人〕

### つながるための、表現のちから

(上田假奈代)

終了したワークショップを評価したり分析するのは苦手だ。感想なら、短い感嘆詞とともに、「…!よかった」と答えてしまう。ワークショップは日常と地つづきにつながっていて、そのくせ日常に持てない感覚一聴こえないようなちいさな音を聴いたり、空気の振動を皮膚がとらえたり、目の奥で光る存在の力を感じたりする不思議な経験をもたらしてくれる。ワークショップと日常の関係は寄せてはひいていく波のようなものだ。瞬間の断面をきりとってあーだこーだというもいまいちピンとはがずれているように思い、ワークショップで経験した感覚を日常に忘れず持っていたいと思う。あるいは日常で経験しモヤモヤしている気持ち、それはまた日常をていねいに生きてるからこそ持ち得る感覚だと思うのだが、その気持ちがワークショップのときに整理できたり腑に落ちたりすると、日常がきゅっと立つ。

ワークショップの評価は時間の経過やその人をめぐる環境や関係とともに変わっていくように思われて、ワークショップのみに性急な評価をくだしたくないと思う。



さて、釜ヶ崎で本格的に活動をはじめた5年になる。実は8年前に釜ヶ崎で自転車屋さんを会場にして詩の朗読と即興ジャズのセッションライブを開いたことがあった。鑑賞してもらえるのかどうかハラハラしたのだが、おっちゃんたちは酔っぱらいながらも楽しんでくれたようだった。それでも、おっちゃんたちと詩をつくる、おっちゃんたちが朗読する、なんて、当時は想像もできなかった。

5年前に釜ヶ崎にカフェとメディアセンターという場を開き、日常がはじ

まった。昨年からマンションの管理という仕事を手がけ、どたばたと毎日が積み重なってきた。そんななか、2011年10月に「こころのたねとして」というワークショップをコソルームで手がけ、飛田会館で谷川俊太郎さんと同じ舞台でおっちゃんたちも朗読した。

今年はスタッフがこの企画を練り上げ、釜ヶ崎の地域内の(わたしたちの拠点ではなく)どこかでワークショップをしようということになった。それは大きな挑戦でもあった。夏祭や越冬闘争で習字コーナーを5年つづけてきて、このまちのおっちゃんたちがことばに想いをもっていることはわかっていたが、ワークショップに来てくれるのかわからなかった。さいわい、三徳寮が会場を提供してくれ、いつもお茶を用意してくれた。コソルームにいつも来るおっちゃんが職場の仲間を連れてきてくれ、「チラシをみた」と言って毎回自転車を40分こいできてくれる方もいた。東京の若者が人づてに聞いてきたと言って旅の途中に寄ってくれた。地域のおっちゃんもよそのおっちゃんも、遠方の若者もいろんな立場の人が多様に集まってくれた。

詩のワークショップは近況を聴きあったり、詩をまわして朗読しウォーミングアップをして、なんとなく落ち着いて、それからふたり一組になる。各回、顔を見て書くにがお詩、インタビューをして書く思い出の場所詩、身体の気になる部位をインタビューして書く身体詩をやってみた。毎回最後に朗読発表する。いくつかの作品は本報告書に掲載するのでご覧いただきたい。

残念ながら紙面で紹介できないのは、声だ。やわらかい声、やさしい声、だみ声、とつとつした声、照れくさいけどなんとか想いを届けたい声、風のような声、いろんな声が波のように寄せてはひいていく。そして、声のあいだから、見たことのないその人の故郷や思い出の場所のおいまで思い出してしまう。でもそれはわたしがどこかで目にした景色やおいを重ねているのだろうと思なおす。声はことばにならない何かをにじませる。その何かにこころが揺さぶられるのだと思う。詩のワークショップは詩が上手になるというよりも、むしろ、ことばにしようとして集中してみてもことばにならなかった何かが声になって誰かに聴かれる場である。すると空間がやわらかい温度を持ち、そこにいて生きていることを認めてもらったような落ち着きもたらされる。おかしくてお腹をかかえて笑いだすような一幕もあるし、うっかり涙がでてくるときもある。

釜ヶ崎でおっちゃんたちといっしょに、こんな時間を持てたことが何よりもうれしい。これが、どんな風に何かにつながっていくか、まだわからないが、まちとつながっていくきっかけになっているという確信はある。

### 事務局レポート

## 「ことばを楽しむ」記録をとおして

ダンス、表現、そして最後のプログラムが詩だ。参加者は初回から継続して参加する人や詩をやってみようとしてくる人、偶然参加の人もまじる。狭い会場と詩の組み合わせはちょうどよい感じだ。毎回、自己紹介をかねて近況報告などを最初にして、詩集をまわし朗読し、詩作、朗読発表へと続く。始終なごやかな雰囲気で行進する。

上田が開発した「こころのたねとして」と名づけた詩のメソッドは、他力本願な詩のつくり方で対話と耳を澄ますことが基調になる。そして声にすることによって、ことばにならなかった何かがたちあがってくる。

初回は似顔詩。ふたり一組になって、10分間みつめあってにがお絵を描くように詩をつくる。おしゃべりはしない。最後にペアごとに朗読。2回目は思い出の場所詩。紙の半分に思い出の場所の絵や地図を描き、ふたり一組になって、インタビューをしい、聴いた話をもとに詩をつくり、その絵の横に記す。最後にペアごとに朗読。

3回目は身体部位詩。ふたり一組になって、身体のある部位についてインタビューをしい、詩をつくる。最後にペアごとに朗読。

2回目のワークショップの記録係の感想には記されている。「朗読の

あと、ペアの相手は照れたように笑う様子が多く見られた。つくる過程を通じて、それぞれのペアの中に通うものがたしかにあったように思う。普段は発話が少なく、感情を出さない人にも、短い時間の中でそれが起きているのはとても興味深いことだった。誰でも表現してよいということが担保され、その方法が示されていれば、どんな人でも表現ができる、あるいははじめてしまうものなのだろう。

担当スタッフの植田裕子は「このつくり方でやっていると、人の詩を聞いても涙出てきて、どうしていいかわからなくなって。この間もコソルームに来た学生が、この街で学んで、ここで出会った人について詩をつくるというのをしてくれたんです。それも聞いてて、涙出てしまって。そんなふうになるってというのは何でなんかなっていうのを考え続けたいなと思ってます」と感想を述べた。

作品のいくつかを次頁に掲載している。その人の声で聴こえないのは残念だが、いろんな声があり、声の調子があり、沈黙の間がある。どうか行間からそれらを感じてほしい。

### まちでつながる 表現のワークショップ 事業データ

会場：にこにこプラザ(大阪市西成区菟之茶屋1丁目10 大阪市営菟之茶屋第2住宅 109号室)

「からだを動かす」 講師：佐久間新(舞踏家)

2月6日(木)参加者：22人 3月8日(木)参加者：24人 4月12日(木)参加者：27人

「出会いを楽しむ」 講師：岩橋由莉(表現教育実践家)

5月10日(木)参加者：12人 6月20日(木)参加者：9人 7月12日(木)参加者：11人

「ことばを楽しむ」 講師：上田假奈代(詩人)

8月9日(木)参加者：17人 9月13日(木)参加者：13人 10月11日(木)参加者：15人



ふたり一組になり、10分間で似顔絵を描くように詩を書く。交代してまた10分。ルールは、おしゃべりしない。みつめられたら目をそらさない。

ある肖像画家のひとりごと

詩を書いた人…ノリ(サカシタ)  
見つめあった人…フルタ サチコ

夏の風が 乙女の顔を とおりすぎて  
肖像画を描く 私のはな(鼻)にもふれる  
偉大なる画家は 若い乙女の瞳には  
決して動揺してはならない

この乙女の謎めいた微笑に  
決してごまかされてはならない  
偉大なる画家は 透明人間になって  
みずみずしいほおずきの実のような  
やわらかい心をみぬかなければ  
一流にはなれない

のりちゃんの詩

詩を書いた人…フルタ サチコ  
見つめあった人…ノリ(サカシタ)

のりちゃんの特徴は  
広い肩と太い首  
首にしわは4本 おでこは3本  
くりくりな目が  
無邪気に見えるけれど  
首とおでこのしわは

のりちゃんの歴史を  
あらわしている  
どんな人生を送ってきたのだろうか

あるひのかわもとさん  
せんのかお

詩を書いた人…クロイ フク  
見つめあった人…カワモト タカシ

みげんに ふかく ふかく きざまれた たてじわ  
よくなやみ よくかんがえ いきてきたのだから  
めじりに ながく ながく きざまれた よこじわ  
よくわらい よくないて いきてきたのだから  
かおに むすうに きざまれた せん  
そのせんのむこうには かわもとさんのいきてきた  
せんがみえかくれする  
ありがとう と ぼくがいうと  
めじりのよこじわのせんが  
すこし ふかくなつた  
あるひのかわもとさん

メガネの奥で

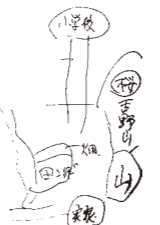
詩を書いた人…カワモト タカシ  
見つめあった人…クロイ フク

色白な顔に乗っている  
黒縁の  
横長のメガネの奥の目で  
私の何が見えますか  
私の過去が見えますか  
未来が見えますか  
残りの少ない人生が  
見えますか  
時計の長針と短針の中で  
迷子になっている

六甲の思い出

思い出の場所を語った人…ササキ  
詩を書いた人…サカシタ

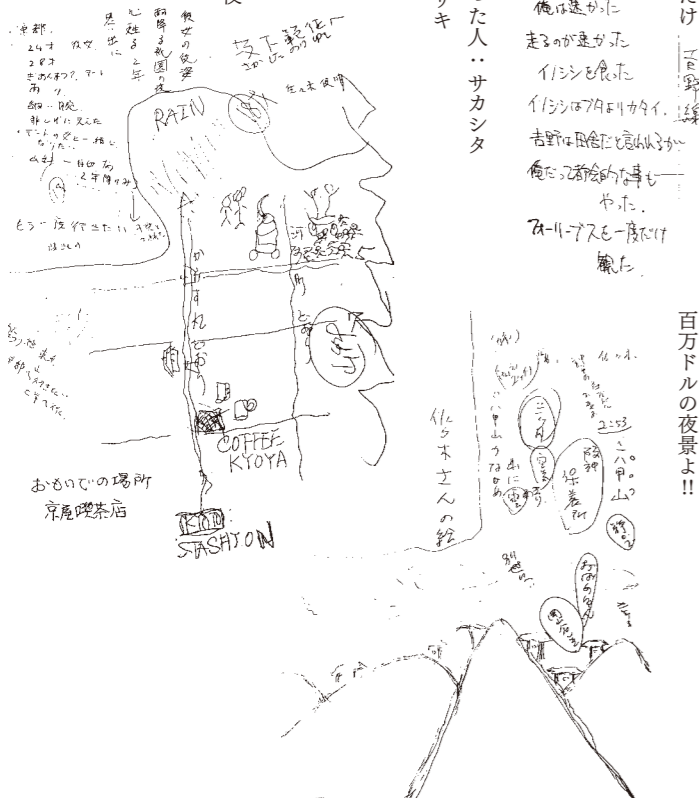
六甲山からながめた  
神戸の街の美しさと  
夜空の星のまたたきに  
保養所のきつかった  
一日のつかれも  
夜霧とともに  
ふつとんでしまった  
近くの保養所の  
おばさんが  
もつてきてくれた  
桃のあまさと人のやさしさを  
西成の地にきて今  
おもいだす  
ああ なつかしの六甲よ!  
百万ドルの夜景よ!!



彼女の後姿

思い出の場所を語った人…サカシタ  
詩を書いた人…ササキ

彼女の後姿  
雨降る祇園の夜  
心魅る2年  
思い出に 祇園祭り  
雨の悲しさに ひたる夜



老いた人間の  
希望は見えますか

明な顔は  
いっしょう  
深い顔で  
すようお日  
様がわらって  
いるようだ。  
マエダ



※さつちゃんは即興でマエダさんの詩を発表しました。

黒と白

詩を書いた人…コダマ  
見つめあった人…ウエダ カナヨ

やわらかく話をする  
やさしい口元  
歌うように微笑む  
りんとした着物姿に  
似合う黒髪  
黒髪にはえる白い花  
リラックスした雰囲気の中で  
日常のきらりと光るものを  
見つめてはにっこりする瞳  
黒い瞳

強い意志・夢・自由を表す黒い眉  
いたずらにたまに微笑む

こだまさんの詩

詩を書いた人…ウエダ カナヨ  
見つめあった人…コダマ

ひまわり畑で大の字にねころんだ女の子は  
毎日しごとについでかけ  
目じりをやさしくカーブさせて  
働く 今日も働く  
ほほがぶくつとしあわせにはずみ  
ひまわりの丘をおもいだす  
ひたいはつよい意思  
まゆげは夕暮れのヤナギの木  
鼻はしっかりと感情をあらわす  
くちびるはさくららの花が ぼわ と咲いたふう  
さくららの花もしごとをする  
春に咲くために 夏も秋も冬も  
まっすぐに  
まっすぐに しごとをする  
いちにち あの人をおもい この人をおもい  
えがおをたやさず  
ときには しんどいきもちに目を伏せる けれど  
ひまわりのように大地に根をはり  
やわらかに目をしばたかせ  
しんじるしごとをコツコツと

身体詩 10月11日

自分の身体の気になる部位をひとつ考える。  
ふたり一組になり、  
その部位について8分ずつ取材をする。  
聴いた話をもとに詩をつくる。朗読する。

まゆげのおじいさん

詩を書いた人…サカシタ  
取材された人…サカグチ

おじいさんのまゆげは  
ついで  
さわりたくなるような  
ふわふわした綿毛のような  
まゆげで  
三才の物心ついた頃から  
おじいさんのまゆげをさわるのが不思議におかしく  
毎日たのしいことでした。

おじいさんはおだやかで、おこることもなく  
にこにこほくの細長のかわいい目を  
のぞきこんで、このみことなまゆげに  
ほこりをもっていた。

まごが たとえ、ほこりを つけようとも……  
二十才になつても、おじいさんのまゆげに、今でも  
マッチ棒二、三本はさめるかどうか  
たしかめにいく。まだ大丈夫だ。  
八十才をこえたおじいさんは  
ときたま昔ほど回数はいりましたが、今でも  
今でも、孫がさわってくれるまゆげ  
に感謝感激の毎日です。

こういうのを、まゆげの関係といいます。

ビッグバン

詩を書いた人…サカグチ  
取材された人…サカシタ

かがやく宇宙の星が冷えていった。しぼんでいった。  
ひとつを指で弾いてみる。  
パーンとぶっかった。  
もうひとつはじいてみる。  
パーン パーン と ぶっかった。  
とんでいったはへんが、もうひとつおまけでパーン。  
ドカーン。ドカーン。ドカーン。

夢見る高橋さん

詩を書いた人…ワタナベ  
取材された人…タカハシ

飲みたくなくても水を飲み  
体が冷えないようにして  
必ず足を座布団の上に置いて寝転び  
お腹に血が集まるようにする  
そして人間の夢を見る  
ゆっくり起きる  
ゆっくり歩いて  
水を飲む

渡辺君へ

詩を書いた人…タカハシ  
取材された人…ワタナベ

「若さを生かして」  
色々なことに挑戦して  
人生観を生かして  
自身に気せず人生は  
一度です頑張って下さい。



# まちでつながる まとめ



## つながり — もっと大きなことばに包まれる

寄せ場である釜ヶ崎は、コレクティブタウンでもある。3畳一間のドヤ（現在は福祉マンション）に暮らすために、もっぱらまちが活用される。たくさんある銭湯、コインランドリー、ロッカー、総菜屋、いろんなお店、路上などが活用される。人々は巧みな「まち使い」である。「まちでつながる」ことにかけては、すでにプロ級だと思う。だが、ゆっくり落ち着いて語り合ったり、表現する場はあまり見られないように思われ、わたしたちはまちのりしろのような場をこころがけてきた。それが「えんがわ」ということばに表されている。

本事業は「おしゃべり」、「健康」、「表現」という3つのプログラムからなっており、それぞれがまちのなかで出会いやすくなるようこころがけた。商店街の路上や道路に面した交流カフェでの健康相談会、あいりんセンターそばのマンションの1階にある元店舗での表現のワークショップ、商店街のカマン!メディアセンターやニカイ!文化センターを会場としたおしゃべり相談会。それぞれの場がもともと人が集まる機能をもっており、まちの人が馴染んでいる。場の管理者のおかげで、えんがわの会が定期的に開催され、人々の認知につながっていった。カマン!メディアセンターでは毎日バザーや手芸、工作、句会などのワークショップをしているが、通りがかったおじさんにチラシを渡し、声かけをする。酔っぱらっていたり、うつろだったりが、スタッフたちはこまめに声をかける。今回もそんなきっかけで表現のワークショップにすべて参加してくれた男性がいた。アルコール依存症から脱出する契機にちょうど重なったと聞く。偶然の出会いを重ねること、まちでつながる、というのは似ていると思う。偶然の出会いが多いほど、そのまちは暮らしやすいと思う。

さて、おしゃべり相談会のことを話そう。この会では解決が示されるわけでもない。ここでは、そんな難しい概念はなく、自分の話したいことをなるべくこころから遠ざからないように話し、ただ聴き合うということを大事にしている。

おもにこの事業を担当した植田は「えんがわおしゃべり相談会」がはじまる前には、この質問したいとか、具体的な解決策を知りたいという気持ちだけど、じっさいこの時間が終わる頃には、もっと大きなことばに包まれる。居合わせられれば、それだけでいい」と語る。もっと大きなことば。個人的なことを話しているのに、大きなことばになるという不思議。素直に聴き合うという場から、生きることは大変だけど、みんなも大変で、生きてるうちは生きていこう、とか思う。くぐもった声のふるえに。さんざめく声の重なりの中に。自分のなかにある、ちいさな勇気がそっと包まれる。この場は、いわゆる支援する／されるの関係での解決ではなく、声が織りなされ、さまざまな立場や記憶が配列を変え、自ら回復していくことの可能性を示唆していると思う。

また、表現のワークショップについても同様に、そのままの存在が慈しむ気持ちとともに表される。植田は次のように語る。「(まちつなワークショップのような場が必要と) ことばをもらうこと以上に、この時間を一緒にすごして、みんなの表情をみることとか、私自身もいやすい場があるっていうことが、うれしい」。一般的によく使われる「癒される」ではなく、「い(居)やすい」ということに注目したい。受動的に癒されるのではなく、そこにひとりひとり存在するというに自ら気づいていくことによって、いやすい。呼吸が楽になって、すうっと身体が軽くなるような感じは、緊張からほどけ、焦りや不安、イライラではなく、いまがいい、自分でいいという充足であろう。照れくさそうにしている背中がすこし伸びる。まなざしのなかにやわらかい光がともる。くすっと笑う。にやっと笑う。日常にちかい感じで、ちょっとだけ違う。そうだ、日常がちょっと素敵になっていくことを願って、この仕事をやっているのだと思いつく。この、釜ヶ崎のまちで。

まちでつながる、とは、人がつながる、ということだ。人にまなざしをむける人がいるまちは人をつなぐ。人につながるために、今日もまちに出かける。苦労をひきうけてきた人がたくさん暮らすまちも夕暮れて、歩いている人の影が伸びる。

## えんがわおしゃべり相談会 講師プロフィール

アサダワタル	日常再編集をテーマに、音楽構成演奏、著述、文化プロジェクトの構想演出、大学講師・講演など、クロスオーバーな表現を展開。主な著書に「住み開き 家から始めるコミュニティ」(筑摩書房)。バンドSJJQ (HEADZ) ドラマー、神戸女学院、立命館大学非常勤講師。
浅野卓夫	サウダージ・ブックス共同代表。文芸書や人文書の出版編集の仕事をするかたわら、雑誌『Spectator』などでエッセイを執筆。2012年4月から香川県の豊島を拠点にし、「群島社会調査班」のメンバーとして活動を開始。
イダヒロユキ	「ユニオンぼちぼち」副委員長、ジェンダー論担当の大学非常勤講師、女性センターでの男性相談、自殺防止センター相談、デートDV防止教育ファシリテーターなど。『ストップ!デートDV—防止のための恋愛基礎レッスン』『デートDVと恋愛』『初めて学ぶジェンダー論』『スピリチュアル・シングル宣言』など著書多数。
尾久土正己	岡山県生まれの大阪育ちで、大学時代は昭和町に下宿し、寺田町の大学へ通う。高校教師、2つの山の中の天文台をハシゴして、2003年から和歌山大学教授。宇宙をいかにして文化にするか日々楽しいことを考えている。
倉田めば	1993年フォトグラファーの仕事をやめ薬物依存回復施設「大阪ダルク」を設立。センター長に。2002年、薬物依存症からの回復を支援する市民団体「Freedom」を多くの賛同者とともに設立。現在は代表。神戸学院大学学際機構客員教授。
坂上 香	大阪生まれで小5まで関西を転々とした。ドキュメンタリー映像作家。NPO out of frame代表。生きづらさを抱える女性や子どもの表現活動「メディア4Youth」や、刑務所でのアートワークショップ等を展開中。
椎名保友	コーディネーター／障がい者日中活動「ほっこり倶楽部」管理者。在宅・施設入居障がい者への介助ならびに派遣事業に従事。地域障がい者支援や介助者育成、東北⇄関西をキーワードに多様なかたちでのポジティブキャンペーンを展開。日常生活支援ネットワーク所属。
西川 勝	看護師。1957年大阪市生まれ。長年、看護師として勤務しながら哲学に関心を持ち続け、40歳を過ぎてから大阪大学臨床哲学で「ケアの哲学」を学ぶ。現在は大阪大学CSCD特任教員。
原口 剛	地理学者。1976年千葉県生まれ、鹿児島育ち。学部で哲学を専攻した後、2000年より大阪市立大学大学院で地理学を学ぶ。現在は大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員。釜ヶ崎の戦後史や野宿者の現状、都市論や社会・空間的排除論などについて研究をしている。
樋口貞幸	1999年、アートスタッフ・ネットワーク設立以降、フリーランスのアートアドミニストレーターとして活動。ナムラアートミーティングやNPO法人アートNPOリンクの事務局を担当。NPO法人アートNPOリンク常務理事。
横 邦彦	なんやかんやあって障がいのヘルパーをしながら「コマイナース」という音楽ユニットで力の抜けた音楽活動をしたり、「オシテルヤ」という無頓着なフリースペースを開いて遊んでました。今は若者の仕事作りの仕事をしています。
宮地尚子	一橋大学大学院社会学研究科地球社会研究専攻・教授。精神科医師。医学博士。1989年から1992年、ハーバード大学医学部社会医学教室および法学部人権講座に客員研究員として留学。1993年より近畿大学医学部衛生学教室勤務を経て、2001年より現職。専門は文化精神医学、医療人類学、ジェンダーとセクシュアリティ。
山田創平	1974年生まれ。名古屋大学大学院修了。文学博士。現在は京都精華大学教員。90年代よりHIV / AIDSのボランティア活動に関わる。現在は大阪を拠点にエイズ予防のプロジェクトを展開する民間団体<MASH大阪>副代表。
岩橋由莉	演劇的手法を用いてコミュニケーションを体験する「表現教育」をベースに、乳幼児から高齢者までを対象に、独自のプログラム「コミュニケーション・アーツ」を展開する。人との間に生まれる目に見えないものを大切にやりとりを楽しむ活動を目指す。ユニークで楽しい五感を使うワークショップを日本各地で展開中。http://haraiso.com
上田假奈代	3歳より詩作、17歳から朗読をはじめ。92年から幅広い対象に詩のワークショップを手がけ、01年「詩業家宣言」を行う。03年コルムをたちあげ「表現と自律と仕事と社会」をテーマに活動し、08年西成区釜ヶ崎に拠点を移す。NPO法人こえとことばとこころの部屋(コルム)代表。最近ことばの棲む木をさがしている。
佐久間 新	1968年大阪生まれ。20歳の頃、流れる水のように舞うジャワ舞踊家のベン・スハルトさんに出会い、自分のご先祖さまに会ったと直感する。その後、ジャワへの留学を経て、現在は山里に暮らしながら、からだの可能性を問い直している。

## 表現のワークショップ 講師プロフィール



まちでつながる。ちょっと生きやすくなる。

えんがわ2012報告書

編集：上田假奈代、植田裕子、小手川望（ココルーム）

装本：高草 建

主催：NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）、社会福祉法人大阪自彊館救護施設・三徳寮 [表現のワークショップ]

共催：津田塾大学ソーシャル・メディア・センター [2/26]

助成：2011年度ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援

特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

大阪市西成区山王1-15-11

tel&fax 06-6636-1612

info@cocoroom.org

http://www.cocoroom.org

ココルームでは活動のための寄付をつっています

◎銀行口座

三井住友銀行 天王寺駅前支店 普通1585265

特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋

◎郵便振替

記号 01090-5-48059 ココルーム

撮影：高岡伸一

釜ヶ崎の支援ハウス「路木」の屋上より